910.28-Ta56ウ
1200500754630
10.28
A56

始

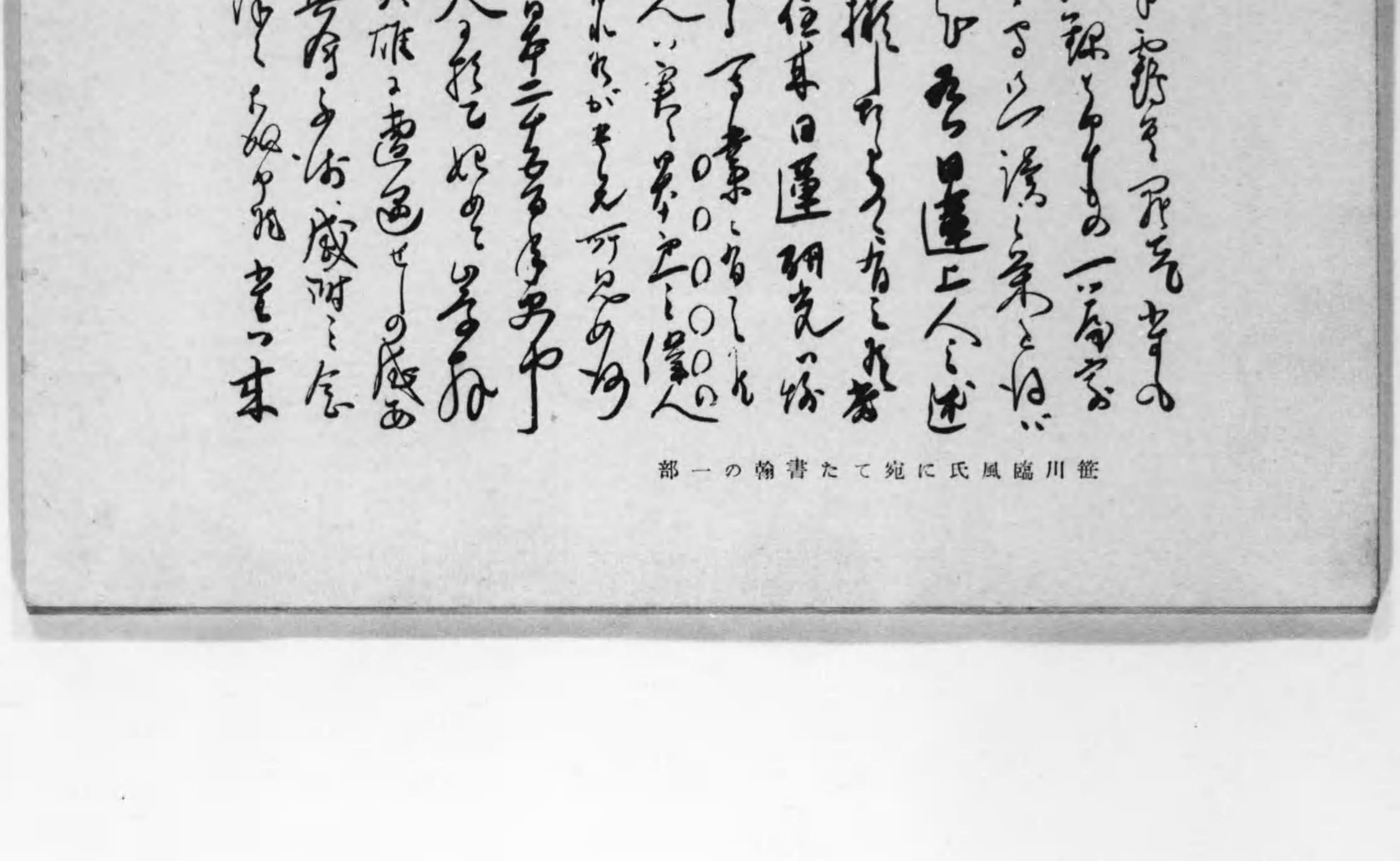
292
910.28
TA56

牛樗山高人文と學

高須芳次郎著

昭和十四年三月廿四日
帝國圖書館

高山樗牛



笹川臨風氏に宛てた書翰の一部

943
176

序

日清戰後、雜誌『太陽』誌上で、私が見た文篇として、今も記憶に新たなのは高山樗牛らの熱烈な日本主義提唱であつた。その主張のうちで、佛教、クリスト教を排擊して、論壇に波瀾を捲き起し、世界主義一派の包圍攻擊を受けたとき、兎も角是非は別として、樗牛が主張のため勇敢に戰つたことは、今日も顧て、彼の意氣を壯とするに足りる。

その後、彼はニイチエの哲學にゆき、一轉、日蓮主義に歸し、あわたゞしい思想生活を送つたが、その外貌や言葉の末を離れて、彼の根柢に横はるものを見る

と、彼が日本的性格を基調として、日本學の建設、日本文藝の創成に鋭意するうへで、一貫したものを持つたことを知るのである。

今日、日本精神昂揚の時代に當り、樗牛こそ第一に回顧さるべき人物で、その美しい詩人的性情と深い浪曼的情熱とは、彼をしていつ迄も若々しさを失はしめず、その天才的未完成の仕事のうへに一個の精彩を放つてゐるのを認めないわけにゆかない。彼の短い一生は幾萬の凡人に優るのである。

この意味で、樗牛を再檢討し、再認識することは、一つの力であり、暗示であり、將來への示唆である。

昭和十七年冬

高須芳次郎

目次

第一章　樗牛の前半生

一、詩人的素質を有する評論家……三

二、中學及び高等學校時代……一一

三、樗牛の文學的進歩とその經路……一八

四、帝國大學卒業前に於ける文學的活動……二四

五、二高教授及び『太陽』記者時代……三三

第二章　樗牛の後半生

一、思想上に於ける轉換……四九
二、樗牛の思想的傾向……五九
三、日本主義宣傳の時代……六七
四、ニイチエヤズムの時代……七五
五、美的生活の提唱から日蓮主義へ……八六
六、樗牛の評論、史傳、抒情文及び學術的著述……九九
七、樗牛の周圍の人々……一〇八

第三章　思想上の日本主義

一、西洋依存排擊……一一三
二、日本主義へ……一一七
三、排宗教……一二三

四、日本主義宣揚……一二六
五、日本的教育觀……一三三
六、教學改革……一三九
七、行學一致の主張……一四三

第四章　文藝上の日本主義

一、日本文學の新研究……一四七
二、日本獨自の文藝創造……一五二
三、古典の新生……一五六
四、國民文學の建設……一六一
五、國民音樂と國歌創作の要望……一六七

第五章　樗牛の道德・倫理的苦悶とその歸結
一、樗牛の一轉機……一七一
二、煩瑣學風への反抗……一七五
三、樗牛の眞摯な告白……一七九
四、ニイチェ哲學の鼓吹……一八五
五、眞實の人……一九二
第六章　樗牛の詩眼と日蓮讃仰
一、樗牛の想界に於ける發見……一九五
二、樗牛の日蓮研究……二〇〇
三、詩人的考察……二〇五

四、日蓮觀に於ける不備……二〇九
第七章　樗牛の大東亞戰豫言と米英排擊論
一、險惡な雲行……二一五
二、樗牛の豫言……二一九
三、皇國日本の重大任務……二二三
四、アメリカの假面を剝ぐ……二二九
第八章　浪曼主義運動と文明史的及び美學的展開
一、日本精神と浪曼主義……二三五
二、樗牛の情熱とロマンチシズム……二四〇
三、空想美の翼……二四五

四、文明史と文明批評の開拓……二四九
五、美學的展開……二五五
第九章　結　言
一、樗牛の本質……二六〇
二、樗牛は未完成の天才……二六三

文人と學

高山樗牛

第一章　樗牛の前半生

一、詩人的素質を有する評論家

今や大東亞戰時下に日本主義昂揚の時が來た。このとき、高山樗牛を懷ふこと切なるものがある。

惟ふに明治時代は、文學上、思想上、今日とちがつて歐化的色彩がいつもどの方面にも濃厚に渦卷いてゐた。この間にあつて、歐洲の文學、哲學をほぼ一通り知りながら、本質的に日本的性格を發揮した情熱の詩人こそは、高山樗牛である。

彼の一生中、一時、ニイチェ主義の使徒たるの觀さへあつたが、よく考へるとそれは、ニイチェの哲學を活用して、日本思想界の弊害を矯めようと意圖したの

であつた。彼は、一時ニイチェを推奬したが、必ずしもニイチェに囚はれたのではない。

だから、樗牛は、最後に日蓮主義に赴いて、いよ〳〵彼の日本的性格を彼の詩的文學のうへに發揚した。或意味において、彼は矛盾の人であり、移り變りの早い人ではあつたが、彼の思想の根柢を貫くのは、日本主義思潮であつて、これがいろ〳〵の形を取つて、表現せられたのである。

之について、當時から今日に至る迄、樗牛を論じた文篇、傳記などは、要するに、樗牛の皮相を撥撫したにすぎないと私は思ふ。眞に樗牛を知るものは、彼の本質が詩人であると同時に、彼の精神、思想が日本主義的內容をもつて、一貫されてゐたといふことを先づ以て了解しなければならぬ。

この點から見て、今日、高山樗牛の人及び思想、藝術は、新しく振返つて見られてよい。惟ふに歐米的な考へと歐米的な感じに囚はれてゐた文壇人の多くは、

かうした樗牛の眞姿を久しく知らなかつたのである。のみならず、それらの文壇人は、時勢に先驅した樗牛の本質を認めるだけの心も眼も持ち合せなかつた。

今、短命に終つたこの天才的な人物、この日本主義の先覺者について正當に知るべき時が來たことは、私に取つて、一つの大きい喜びである。

明治年間の文士中には往々短命な人を見るが、殊に高山樗牛は最も短命な一人である。

正岡子規は三十六歳、尾崎紅葉は三十七歳、落合直文は四十三歳、大西祝は三十六歳、樋口一葉は二十五歳、齋藤綠雨は三十八歳、綱島梁川は三十六歳、原抱一庵は三十九歳、大橋乙羽は三十三歳と云ふ風に彼等はすべて早く世を去り、國木田獨歩、川上眉山なども亦短命で共に三十八歳で卒去した。

さういふ間に於いて樗牛は一葉、乙羽と共に最短齡者の列にある。卽ち彼が他

界したのは三十三歳の時で、子規よりも三年早く、紅葉よりも四年早い。今日の文士は樗牛の歿した年齢時分に漸く文壇に知られはじめるのが普通で、到底樗牛の仕事の十分の一も出來てゐないのが寧ろ當然とせられてゐる。

かういふ事を考へると、樗牛の一生は一つの驚異である。彼は確かに天才肌の人物で二十三歳の時、『瀧口入道』を書いて文壇に現はれて以來、三十三歳迄約十年間、些かの惰容なく、緊張し切つた歩みを續けた。殊に二十七歳の頃、井上哲次郎博士らと共に日本主義を提唱して、健闘した頃から、彼は漸く文壇注目の一焦點となり、三十一歳前後にはその言説に於いて時々、文壇の視聽を驚かし、評論界に於ける中心人物となつた趣がある。彼の一生は充實した文藝的活動、詩人的飛躍そのものであつた。

彼の友人姉崎嘲風博士の傳ふるところによると、彼の志望は最初から研究と評論とにあつた。言ひ換へると、學者兼評論家となるにあつたらしい。元來、彼は

多面多角の才人で、歴史小説家となつても、相當立派に生きてゆくことが出來たのだ。また詩人としても、新聞の主筆としても、意義ある仕事をすることが出來たらうと思ふ。けれども、彼は生涯の仕事を研究と評論とに限定して、それ以外には成るべく、手を觸れようとしなかつたと傳へられる。そこに彼の一見識があつた。

以上の事について嘲風博士は、

「著者（樗牛）は其少年時より既に研究と評論とに依て世に起つべき覺悟を抱きしかば、小説に筆を執るはその本意にあらず、又小説家を以て目せらるゝ事を避くるに勉めたり。此を以てこの一篇（瀧口入道）が日就社懸賞の選に當りしも、新聞には匿名掲載を要求し、その後も決して自らその作者たることを公言したることなし。」

と述べてゐる。普通、樗牛のやうに懸賞小説に當選するならば、斷然、小説家

として起たうと考へるのが至當である。ところが、樗牛が飽迄、研究と評論とに終始しようとしたのは、聰明な行き方と思ふ。けれども、『瀧口入道』を書いた頃の樗牛、また懸賞に應募した樗牛の心事を考へると、いくらか小説家とならうとした野心もあつたらうと思ふ。が、愼思熟慮の結果、小説家たることを斷念して、その最長所たる評論と研究に全力を注がうと決意したのではあるまいか。この點はも少し考へて見るべき必要がある。

かういふ風に最初、歴史小説『瀧口入道』を以て文壇に出發した樗牛は單なる評論家ではなく、また單なる學者でもなかつた。いづれかといふと、詩人的素質を多量に含有し、社會的、道德的方面にも關心した視野の廣い評論家であり學者であつた。彼の趣味はひとり歐米文學の上にあつたばかりでなく、日本支那の古典の上にもあつた。また東西の史傳方面に對しても相當の興味を持つた。即ち彼は文藝評論家として最も知られてゐたが、その實、文明批評家、社會評論家、歴

史文學者、倫理、美學の研究者でもあつて、極めて多角的である。が、それを樗牛自らの人格、主義によつて統一し、渾然たる趣を示してゐる。そこに破綻なく、分裂なく、混雜を見ないところが、樗牛の傑出せる所以である。それによつて樗牛が如何に强い個性の人であつたか、又如何に烈しい情熱、自信の人であつたかが推想せられる。

以上は大まかな概見で、彼の本質については後にもつと詳しく說く。玆には樗牛の仕事がどんなものであつたかといふ事についての、所感を述べた丈である。これ丈の仕事が、十年間になされたのを想ふと、虛無白眼主義の正宗白鳥のやうに、冷やかに樗牛を鞭つ事は出來ない。三十三歲で死んだ樗牛の短命を思ひ、二十三歲から十年間の文藝的活動が彼の仕事の全體である事を思ふならば、樗牛の年齡、周圍、閱歴などを篤と考慮のうちに入れて、穩當な判斷を下すのが至當である。彼が有名であるが爲めに今日の進步した時代や程度の上から、嚴に樗牛を

批評するのは間違つてゐる。白鳥自身とても、三十三歳迄にどれ丈の仕事をしたか、それを反省するならば、樗牛に對してもつと思ひやりのある批評を爲すべきではないか。

私とても、今日の眼で樗牛の業蹟を見たら、無論失望することが多い。これは既に私が『近代文藝史論』を書いたときにも氣付いたことである。けれども然ういふ風にして、明治年間、殊に日露戰爭以前の評論、創作を眺めるならば、大抵失望させられるものばかりで、一代の文豪と稱せられた紅葉その他の作品、評論とても、「こんな處にぶらついてゐたのか。」と思はれるばかりである。それで私は樗牛の業蹟を闡明するに當つても、冷やかな白鳥式の態度を執らないで、寧ろ暖い同情を以て彼に對し、樗牛生前の文學的程度をも頭に入れて、彼の眞相を解剖し紹介し批評したいと思ふ。

二、中學及び高等學校時代

樗牛の文學的事業を論述する前に、一應述べて置かねばならぬのは、彼の閲歴である。樗牛がその鄕里山形縣鶴岡に生まれたのは明治四年のことで、それは魯文が『安愚樂鍋』を書いた年である。卽ち西歐文明の新潮が次第に日本に流入して當時の文壇人にも漸く影響しはじめた時代である。そして、彼が日記を書き出した十五歳の時は、丁度、小說界の黎明を報じた『小說神髓』、『當世書生氣質』第一卷が出版せられ、一方では西歐崇拜を象徴したロオマ字會が起つた。

彼の日記『光陰誌行』によると當時の生活の一半がわかる。彼は中學生として能く學科を勉强し、傍ら日記など書いて文章の進歩に資しようとした。彼の中學時代に書いた文章は『春日芳草之夢』などで、當時彼は『穎才新誌』などを愛讀し、漢文直譯體の文章を好んだ。この事は日記、殊に『春日芳草之夢』を見ても

わかるが、漢文風の文致を基調とすることは、彼の最後迄殆ど變らなかつた。既に『光陰誌行』には、後年の文章に見る佶屈でわかりにくい漢字が夥しく散在し、彼の常癖ともいふべき詠嘆的言辭が多い。が、十五歳の學生の手に成つた文筆としては雄健、暢達の趣を示して、何となくもう一家の風格が見えるところに、彼の天分と努力の尋常でなかつたことが推察せられる。

霽牛が第二高等學校に入つたのは、明治二十一年卽ち彼の十八歳の時である。その前々年、（十九歳）彼は入學準備をするため、十月上京して、東京英語學校に入つた。その月十日、彼が東京本所の寓から福島縣の友人近野衞門治らに送つた手紙には、上京途上の模樣や初めて見た東京の有樣を略叙してゐる。當時、彼は一週間ばかり東京見物に日を送り、傍ら學校の樣子などを調べた。そして銀座の繁華には一驚を喫したことを友人への手紙に記してゐる。今その一節を拔萃する。

凡て建築物は立派にて、參謀本部、印刷局、鹿鳴館（見て名を知りたるもの）其名の分らざる、立派なるもの澤山あり。銀座の立派、且つ繁華なること驚くべし。（大略）

「車引きの勸めるに弱りたり。

「町に行けば欲しい物澤山なるに弱りたり。

「田舍者と輕蔑せらるゝに弱りたり。

「人の家に行くに町の遠きに弱りたり。

「別嬪の多くして涎の費多きに弱りたり。（是は極内々、失敬）

「人通の多くして避ける遑なきに弱りたり。

「物賣の分らぬに弱りたり。

「道を知らぬに弱りたり。

「廣大なる建物多くして驚くに弱りたり。

「時々虎列刺の病人に行遇ふに弱りたり。

右は東京の十弱り、人力車大抵二人乘にて、一人乘はなし。

樗牛の言ふところは頗る要を得て、率直にその感じを現はしてゐる。今一つ、樗牛が弱つたのは殆ど友人がなく、偶〻知人があつても、それを訪ふため二里餘の遠方へ出かけなければならぬ不便さであつた。それで彼は頻りに故郷の友人を思つた。ついで間もなく、東京英語學校に入つたとき、同級の生徒のリーディングの巧みなのにも驚いたことを友人に報じてゐる。

それから樗牛は早くから芝居を好んだので始終新富座、市村座、千歳座、中村座、中島座などの消息に注意し、時々、一幕宛の立見をした。また二十年正月、樗牛は向島、愛宕、龜井戸その他の地を散策して上京の甲斐があつたと喜ぶ旨を友人に申送つた。

彼の東京英語學校に於ける成績は優等であつた。それについて二十年十二月、

故郷の實父（齋藤）に宛た手紙に

「先月は試驗成績優等のため昇級致し、且つ本月の月謝を免ぜられ候。先づ平常學校の模樣は中等以上にて候間、御安心可被下候。」

と述べてゐる。當時彼は第二高等學校の補缺試驗に應ずるため、懸命に準備をした。彼は英語に堪能であつたが、數學は不得意であつた。それで愈〻仙臺で受驗した際、今度は英語よりも數學の優等生を採ると聞き、多分落第であらうと悲觀した位である。既に彼はその事を友人に報じたほどであつたが、幸ひ試驗を通過して安堵した。かうして彼が第二高等學校に入つたのは二十一年一月のことである。

東京生活に漸く馴れた彼も仙臺にゐるやうになつたとき、どうしても東京の繁華が眼にちらついて、忘れられなかつた。その活潑、清新に見ゆる社會生活が常に樗牛の憧憬するところとなつた。それで彼は東京にゐる友人の許に

「熟々考ふれば、東京に居りし方、便利にて經濟なりしかも知れず。東京に居れば、萬事目に見るもの、耳に聞くもの、皆吾人の思想を刺戟して、吾人の精神を活潑にし、爽快にし、政治思想（ちと大袈裟なれど）を發達せしめて、吾人をして卑屈に遠ざからしむるが故、吾人の進路にはいと都合よかるべく……」

云々と申送つた。そして樗牛は折があれば、第二から第一高等學校へ轉じ、彼の好む東京生活を續けたいと望んだ。

樗牛の手紙によると、仙臺生活は彼に好感を與へなかつたらしい。かなり仙臺に住み馴れても、彼は故郷鶴岡の方を遙かによいと思つた。それについて二十五年一月、妹なを子に與へた手紙に、

「當地は天氣時候ははるかに鶴岡よりはよろしく候へども、我目の中にはかへつてあれすさまじきふる里のふゞきの方したはしく存候。今ごろいかに御くらし被成候やらん、夢のかよひ路とかく清川の關をたどり申候。」

と言つてゐる。

樗牛は度々、妹に手紙を與へ、女子の修養に就て懇切に教訓した。彼は

「思へばおん身も人に嫁すべき人となりたれば、今までの如きぼんやりしたる心にては相成らず、よく〳〵女子の道を心得らるべく候。わが思ふ所にては、女子の第一貴ぶ所は愛の一字に有之べくと存じ候。女子は男子の苦しめるとき悲しめる時に嘗て、其愛情をもて之を慰むるが務なり。」

と言ひ、

「愛は女子の精神なり。愛を除きては他に女子に貴むべき德なし。貞操は夫を愛するによりて生じ、慈悲は兒を愛するによりて生じ、親切は他人を愛するによりて生ず。」

といひ、家庭雜誌及び新聞を熟讀すべきことを勸めた。蓋し樗牛は當時七人の兄弟中、最も妹なを子及び弟良太を愛したので、特になを子には常に眞情を流露

したのである。

三、樗牛の文學的進歩とその徑路

樗牛が高等學校時代に於ける文學的進歩はどうであつたか。二十四年代には注目すべきものはないが、二十五年末には『厭世論』及び『戯曲に於ける悲哀の快感を論ず』の二篇を書き、後者は二十二歳の一青年として侮り難い技巧と見解とを示し、後年彼が美學研究に耽るに至つた傾向を暗に示してゐる。

蓋し樗牛が文藝評論家として卓越すべき徴候や、またその將來に示した長所短所は早くも『戯曲に於ける悲哀の快感』中に示された趣が見える。それから一方に於いて、樗牛が當時の文壇及び學界の影響を受けたことは、嵯峨の屋の『初戀』、湖處子の『歸省』などが出た後に『戀情論』『故郷論』などを書き、クリスト教の或雜誌が眞善美の合一を唱ふるのを見て『文學及人生』を書き、哲學の民衆化

的氣運に應じて、『厭世論』を書き、硯友社一派や村上浪六の歴史小説、田口鼎軒の雜誌『史海』刊行によつて、史傳文學が勃興しようとするのを見ると、『瀧口入道』に筆を染めるなど、すべて樗牛が時代の傾向に動かされ、敏捷にそれに適應していつた樣子が窺はれる。二十一、二歳頃の彼に然うした模樣があるのは當然のことであるが、一面、彼の感受性が人一倍鋭かつたことを思はせる。

彼の『戯曲に於ける悲哀の快感』は大西操山が二十四年に發表した『悲哀の快感』を讀み、不滿な點について操山に質し、合せて樗牛の見解を述べたのである。操山の美學研究は美學好きの樗牛の平生見逃さなかつたところであつた。如上の論文は明かに樗牛が評論家として、初めて一家の風格を作つたことを示してゐる。それには情趣あり理路あり潤ひがある。この種の論文が陷りやすい學究的臭味が見えない。左にその一節を引く。

夫れ悲哀なる事物の吾人に快感を與ふるに要する所は種々あるべしと雖も、其

悲哀が假在のものにして實在のものに非ざることは第一の要素ならん。吾れ人は其悲哀なる事實の目前に實在せざることを確信するが故に、其悲哀より快感を享くるを得る也。小說詩歌の中に苦める少女義人を見て快感を覺ゆるは、此少女義人が現在我が目前に苦むに非ずして、只我が想像中の幻影が苦み惱めるに過ぎざる事を確信すれば也。演戲は想像の活潑なる者に過ぎずして、吾人が胸中に描ける幻影の假の奧在（若し斯く言ふを得ば）を與ふるのみ。吾れ人は現に號泣の聲を聞き、現に愁嘆の形を見る。然れども此悲哀の間に快感を覺ゆるは之れ模倣に過ぎずして、實の人が實に號泣し、實に愁嘆するに非ざるを知れば也。若し舞臺上の判官が眞の判官にして眞に腹を切り、眞の顏世御前が眞に髮を切り、眞の由良之助の無念が眞に五臟六腑に浸み渡らば、忠臣藏四段目は徒に殺風景を呈せんのみ、なんの快感か之あらん。要するに悲哀の快感は、只想像の場合に於いてのみ起るものなることは爭ふべからざるの事實なり。

大西氏の所謂社會性情とは、他人の悲哀に惻隱の情を起し、他人と共に哀樂する同情同感を云ふ。十分他人の悲哀に惻隱同情の念を起すには、其人の受け居る悲哀の實情の極めて明晰に、極めて酷切に我身に感じ、我身自らが其境遇に立てるの思なかる可らず。而して眞に他人の心事を理會するには、想像中の假設的人物を夢みんよりは、現在事實を目擊するに如かざること素より言を待たず。然らば則ち大西氏が社會的性情は、詩歌戲曲に於いてよりは、實際の人物が實際に悲哀するを見る場合に於いて一層大なるべき理なり。卽ち大西氏の說に從へば、芝居の忠臣藏四段目を見んよりは、實際の判官の切腹を見る方、遙かに愉快なるべき理なり。是れ全然吾人の經驗と天性に背反するものに非ずや。芝居なればこそ朝顏の物語も面白けれ、詩歌なればこそオフエリヤも樂しけれ、實際薄命の盲女狂婦を見て何の快感あるべきや。（下略）

操山の說を駁する上に於いて、樗牛の筆鋒は銳利である。が、操山の立場は主

として社會的、道義的な方面にあり、樗牛の立場は心理的、哲學的乃至經驗的美學の上にあつたので、そこに自ら見解の相違を來たしたわけである。彼は『戯曲に於ける悲哀の快感』を發表した翌年、『傷心錄』を書き、次いで東京帝國大學文科に入つた。それは彼が二十三歳の時である。爾後、樗牛の文學的活動は漸く目ざましさを加へた。

が、茲に仙臺時代に於ける彼の仕事として特記すべき點が二つある。それは

(一) 彼が率先して文學會を組織し、『文學會雜誌』を出した事、

(二) 近松巢林子の研究を始めた事である。

『文學會雜誌』は樗牛の文藻を練つた最初の壇場であつた。それから彼の近松研究は恐らく、當時の國文學復興に刺戟せられたのと、彼自身の趣味とによつたのであらう。彼はその研究を二十三年頃から二十八年頃——『早稻田文學』同人が近松研究會を開く頃迄繼續し、その成果を一冊子に纒めようと考へてゐた。それ

は研究の體裁や緒論中に「本書」とあるのを見て、彼の志向を察することが出來る。

近松については二十七年六月、その弟良太の許へ

「鄕の家にある近松淨瑠璃、世話にあらざる分悉皆、及び尙志會雜誌第一號共、相州逗子田越村山岡別邸宛にて御遞送ありたし。近松も調べて見たき念慮あれば。」

と書送つてゐる。それは恐らく世話物の方は平生手離さなかつたが、時代物は手許へ置いて來たからであつたらう。

東京帝大文科に入つてから、樗牛の進歩は特に著しく、二十六年の暮、『讀賣新聞』の懸賞小說に應募するため、二十日間ばかりで『瀧口入道』を書きあげた。それが愈々當選して、四月十六日（明治二十七年）から『讀賣』に掲げはじめられると、樗牛はその父の許にその樣子を報じ、

「私事此度讀賣新聞懸賞小説にて優等賞金時計一個を得、之を金子にて受取り、五十圓を得申候。右は『瀧口入道』と申す命題のものにて、三十三回にて完尾するものに候。（中略）其五十圓は、大半學資の方に差向け、其一部は靴、書籍等、要用なるもの買求め、其一部は良太歸省迄の學資の一部に致度志望――此度の得金はホンの僥倖にて、後來如此ことあるべきものにあらず、とんだまぐれあたりもあるものに御座候。」

と謙遜し、事もなげに云ひ捨てゝゐるが、そのうち窃かに又樗牛の得意らしい樣子が見えぬでもない。

四、帝國大學卒業前に於ける文學的活動

それから間もなく、樗牛は二十七年夏、鎌倉の史蹟を歴訪したが、その際弟の許に

「一度び鎌倉の地をふめば、心何となくさびて、得も言はれぬ感情勃興、あはれ吾れ詩人ならましかばと、しみ〴〵被思候。當地（田越村）の入口に六代御前の墓あり、千年以上の古木の下に見る蔭もなくあれはてあり。夕暮時、此小丘の上に上りて六百年前の古山河を追想せば生ける平家物語は吾等の心の眼にうかび申候。」

と述懐した。『瀧口入道』の事、鎌倉に於ける感慨の樣子から察すると、樗牛が近松の戯曲と共に、『平家物語』を耽讀したことがわかる。嘲風はこの點に言及して「その初期に屬する者は著者が如何に唐詩、平家、馬琴、近松等の文體に得る所ありしかを示す。」といつてゐるが、さうすると、馬琴の小説、唐詩の類も彼が平生最も好んで誦じたものであらう。

それから當時起つた日清戰爭は、樗牛の思想、精神を鋭く刺戟し、一種感奮、興起の感を與へた。二十七年十月、彼は弟の許に通信してフランス語の學習をは

じめたことを告げ、次に日清戰爭に言及して、

「兎に角我紀元以來の國民的大活動なれば、今日の日本は凡ての部分に於いて大影響を受くべき也。この盛世に生まれて、一事業の後世に標示するに足るものなくば、成歡役の一喇叭卒にだもしかざらん、穴賢々々。」

と決心した樣子を述べてゐるが、更にその翌日の手紙にも

「近刊の哲學雜誌に獨逸の哲學大家クノー・フッヒシエル氏の七十の賀の景況を記載しありしが、ハイデルベルヒの町にては、氏の同府に住せらるゝを榮譽として、府民一同より名譽市民の前例なき特典をさゝげ、各州の大學、皇族、大臣等は、わざ〳〵代人又は本人自身に此賀筵に與り、府は全體賀意の出來るだけを表し候よし。我日本人民の狀態に比すれば、實に霄壤も不啻。我人民は、到底かゝる形而上的學問に適する國民なるや否や、うたがはしく御座候。我邦には哲學の歷史なし、又哲學家もなし。」

と慨嘆して氣焰を吐いた。樗牛が日本に哲學があることを知らぬのは素養の不足にもとづくが、これはひとり樗牛を責めるわけにゆかぬ。當時の學者、思想家は皆日本哲學に對して無智だつた。それに樗牛としては年齡上止むを得ないことで、その意氣の壯を多とすべきであらうか。

その翌月（二十七年十一月）は樗牛に取つて最も記憶すべき月で樗牛が文壇に出てゆくべき機會が漸く近づいたのである。といふのは、『帝國文學』が將に誕生しようとした際で、樗牛に取つて、それは一種の文學的初戀ともいふべきものであつたからだ。彼はその事を弟の許に報じて、

「此度井上哲次郎先生を初め、上田、三上、高津、芳賀諸學士、塩井、武島、姉崎、岡田諸氏と共に文學會を起し、帝國文學と申す雜誌を來年一月十五日初號發刊とことき め、圖書會社にて發行の事に約束致候。何ができるやら心配に御座候。しかし予は發起せしものゝ、よく考ふれば學業の始に付、斷然編輯員

などにはならざる積りに御座候。」

といつてゐる。

が、その實、樗牛は內心、『帝國文學』に對して强い熱意を持つてゐた。「何が出來るやら心配に御座候。」といつた言葉にも、樗牛がどうしてよき雜誌を作らうか、またどうして立派な外形、內容を世に示さうかと苦心した樣子がほぼ察せられる。果然、十二月に入つて弟へ通信した中に

「予は此度は雜報及び批評を引受け、第一號には發行の主旨をさへ負はされ困入候。」

と暗に自負的口吻を洩らした。

彼が起草した『帝國文學』の序詞は今日から見ると、幼稚なもので、中學生の作文を見るやうであるが、當時の程度では決して幼稚と云へなかつた。が、その妙に强がつてゐるところは、樗牛の常癖で、そこに彼の長所、短所がその儘出てゐる。その序詞の末に

「嗚呼一帶の蜻蛉州、首尾を通じて七百里、歷史を遡れば三千年、山河の美、風俗の醇、字內其倫を見ず。今や國威外に張り、人心內に振ふ。大東帝國の文學、豈獨り久しく此の如く落莫ならんや。」

といつてゐる所は稚氣多きに過ぎるが、意氣込に於いて確かにすぐれてゐた。

樗牛が『帝國文學』發刊前書いたものとしては、二十七年六月の『早稻田文學』に發表した『老子の哲學』が優れてゐた。その雄健、明快な文章は、老子の思想を解剖して、要を得てゐるが、いづれかといふと、眼光紙背に徹しない。卽ち老子の語句に拘泥し、樗牛一流の獨斷を以て、老子を是非し、恣まに上下した缺點がある。婉曲、周到は樗牛が、一生得意とするところではなかつた。明快ではあるが大づかみで、ともすると、偏見、獨斷に傾きやすかつた有樣は、『老子の哲學』に於いても現はれてゐる。

が、『帝國文學』二月號、四月號に發表した『近松巢林子の人生觀』、『巢林子の女性』及び『太陽』四月號の『近松の戲曲に於ける人物性格』などは、當時にあつて、出色の研究論文として文壇に注目せられた。それは新しい自由な考察を近松の作品の上に加へ、哲學的、科學的の立場から、內在批評を試みたのである。特にそこには卓見もないが、在來の評釋などにくらべると、遙かに新しく、進んだところがあつた。殊に彼の明暢、流麗な文章は、近松の作意、精神を闡明して、フレッシュな快感を讀者に與へた。

それから間もなく、その年七月彼は『太陽』の文藝評論を擔當するに至つたが、恐らくそれは同鄕の友人、大橋乙羽の斡旋によつたと思ふ。乙羽は確かに樗牛の知己であつた。三十四年、乙羽が歿したとき、樗牛は「自ら文學者たる子（乙羽）は、今の文學者の境遇に對して常に深厚なる同情を有し、出版事業として許し得る限り、務めて其の便宜を計りたるの事實は、吾等の平生親しく見聞せし所也。」

と嘆稱した。かういふわけで、樗牛が明治三十年四月、博文館に入つたのも、乙羽の盡力によるところが少くなかつたのである。

樗牛が『太陽』の文藝欄を擔當したのは約一年半であつた。といふのは、彼が帝大文科卒業匆々、第二高等學校教授として赴任することゝなつたからである。彼が『太陽』に掲げた『退壇に臨みて吾等の懷抱を白す』の文中に

「十有六ケ月の間、吾等の本紙上に言議したるもの、無慮二百五十頁。哲學、史學、文學の諸科に涉り、歷史、戲曲、小說、詩歌、宗教、美術等、事に隨ひ、時に應じ、論策建言したるもの、一書生が窓外の全業としては、强ち勤めずと謂ふべからざるに似たり。事往々過去に遡り、未來に及び、必ずしも時事に切中せざりきと雖も、當代文運の潮流に一滴の加ふるものなきに非ざるを信じて、心潛に甘んずる所あり。」

と幾分高く標置してゐる。

それから樗牛は尙「文學の審美的評論に關しては、吾等は十分の懷抱を表はすの機なくして已みぬ。」といつてゐるが美學方面に於ける彼の熱心は非常に高度に達してゐた。それは彼が二十八年六月、ドイツの美學書を購入する費用を父から送つて貰ふため、その事情を詳述した手紙によつてわかる。

（前略）學者の書籍に於けるは勇士の武器に於けると一般にて、必要不可缺事に御座候……私事不幸にして書籍とては甚だ少く、專門上の學術に關する者は皆無と申候ても宜敷事に御座候。之れ洋書、殊に專門高尙の書籍の非常に高價なるよりして不得已事には御座候得共、將來學者として世に立たんとするには、赤手を揮て戰場に臨むと一般に可有之、此事平素より甚だ懸念罷在候。乍併いつまでも斯くあるべきに非ざれば、思切つて御願申上候……書籍としては審美學と申す學問に關する書にて、獨逸國に註文致候ものにて候。當時は銀貨低廉の事故、頗る高値に相成候事萬不得已ことに御座候。其金高は凡三十圓位に御

座候。之にて凡そ二部六冊程買入得べく候。（下略）

樗牛のやうに才華煥發するものは、ともすると、研究を疎外し勝ちとなるが、樗牛にはさういふ缺點が存外少く、一方でその蘊蓄を吐露すると同時に、他方では美學その他の研究を怠らなかつた。彼は無論、天分豐かな人ではあつたが、また不斷努力の人でもあつた。が、一生、特に世を驚かすべき學術上の發見、創造を爲さずに終つたのは彼の短命なためであらう。

五、二高教授及び『太陽』記者時代

樗牛が第二高等學校教授の職にあつた時代については多く語るべきことがない。彼は英語、倫理學などを生徒に教へ、傍ら文藝部長を勤めた。未だ娶らぬ彼は、犬一匹、女中一人と云つたやうな淋しい生活を續け、家庭に於ける慰安を得べき便宜が殆どなかつた。そして仙臺にゐても、心は東京の空に飛んで、始終上

京したいと思つたことが度々であつたらしい。

蓋し樗牛が最初、二高に赴任するときは、もつと期待を持つてゐたかも知れぬ。けれども實地に當つて見ると、寧ろ幻滅を感じた。それは彼が桑木嚴翼博士に與へた手紙のうちに

「教授連は都落の連中故、意氣沮喪のもの多きやに相見え申候。直前不撓の大勇猛心あるものは極めて少きやに相見え申候。英語の教員（樗牛自身）などは實に〳〵いやに相成申候。都こひしく〳〵て日々茫然暮居候。」

と云つてゐるので、彼の胸中が察せられる。

當時二十六歳の彼の眼に老成振つた地方教授の樣子が退嬰的に見えたのは怪むに足らない。また語學技師ともいふべき英語教員の職が彼の氣に入らぬのも當然だ。さうした幻滅の結果が東京憧憬を增したのは至當の歸結であらう。彼は當時桑木、姉崎、建部などが東京に留つてゐるのを羨望して

「諸君のいよ〳〵盛んなる樣子を耳にし、轉た伎癢の嘆に不堪。」

と嘆じ、同僚中、佐々醒雪が一向、煩悶の態なきに失望して

「醒雪は依然醒雪なり、尤らしき顏してゐるところ妙なり。」

と冷評した。

かうして樗牛は悶々のうちに日を送つたが、さうした間にも、彼は東京に於ける學界の消息に注意し、桑木氏に向つて

「宗教家懇談の如き、つまらなきことはヨスガヨシ、比較宗教學界の事業のウブなこと如何。姉崎にも潛心勉學の時間を與へたし。」

と氣焰を吐いた。右の如く、樗牛は二高教授の職にゐることを潔しとしなかつた折柄、校內に或紛擾が起つたので、三十年四月頃、一度辭職しようと決意したが、或先輩の忠告によつて、心ならずも一時踏み留つた。

この時、樗牛に取つて一つの會心事であつたのは、前述の大橋乙羽（硯友社同

人）から樗牛を『太陽』文藝主任として博文館へ招聘したいと申越した件である。樗牛は殆ど思慮を費さないで、この招聘に應じ、程なく、仙臺を去つて博文館編輯局の人となつた。かうして彼は『太陽』執筆の傍ら、之が編輯監督の任に當つたのである。樗牛が最初入館するとき、

（一）原稿相認候は小生私宿にて致度候。右は衆人雜鬧の間にては何分不任意に候まゝ（二）御館に出勤の時間も可成少く致度、大抵の事は私宿にて辨度候

と乙羽に申送つた條件は或程度迄容れられたものと思はれる。

それから程なく、樗牛は結婚したのであるが、その手紙には結婚について何等言及してゐない。が、三十二年二月、父に送つた手紙には「お里（夫人）事は、昨年十一月頃より懷姙の樣子に御座候。」と記してゐるのを見ると、彼は三十一年秋頃、結婚したのであらう。それは博文館に通勤するやうになつてから、萬事、家内のことについて不便を感じた爲め、結婚するに至つたものと察せられる。他

の事について相當雄辯な彼が夫人のことについて沈默したのは日本の常情であるけれども、聊か物足りない。

彼が折々、旅から夫人に贈つた手紙を見ると、夫婦間の交情は相當溫かであつたらしい。彼が三十二年五月、羽前山形から東京の夫人に與へた手紙に

「イヤハヤ山中の事なれば、食べるもの更になし。是れを思へば、内の料理を惡く言ふナゾは、勿體なき事と後悔仕候。」

といひ、また三十四年一月、夫人への手紙に

「追て身體は大切に可被成、子供も風ひかぬ樣注意肝要に御座候。世の中に健康なるほど寶は無之候。」

といつてゐるところに夫人に對する溫い愛情が見える。

一體、樗牛は平凡なる父、平凡なる夫であつた。即ち普通世間並の父であり、夫であつた。が、多少氣むづかしいところや、口のわるい癖は平生あつたらしい。

また彼は家計について相當意を用ひ、放漫な生活をしなかつた。さういふうちにも彼の手固い父が彼に官途に就くことの安全と生活上の便利多きを申送つたのに對し、樗牛は民間に於いて、自由に仕事をしてゆかうと固く決心し、生活の不便は多少忍ばうと考へた點は一見識である。彼の材器を以てすれば、官途に就くことは困難でなかつたらうけれども、彼の性質、趣味は、より多く民間の仕事に傾き易かつたのである。

そのため、彼は物質的に損をしたかも知れぬが、彼の同輩中、最もよく文壇、思想界に活躍することが出來た。それは主として彼が民間に地位を占めようとした結果にほかならぬ。

樗牛が『太陽』文藝欄を主宰するやうになつてからの活動は殊に顯著で、常に新しい問題を文壇に提供し、且つ倫理、宗教、文藝、社會各方面に向つて忌憚なき論評を下し、往々第一流の大家と論戰して旺んに氣を吐いた。その間、時々散

文詩風の抒情文を書き、或は藝術味ある論篇を草し、極めて華やかな活動を續けて、文壇を賑はした。それらを總括して考へると、樗牛は主觀的乃至主情的な學者型の詩人で、純客觀的、純理性的な評論家ではない。蓋し彼の一生は青春そのもので、青春の誇りとするところは熾烈な若々しい情熱の上にある。抑へようとしても抑へ切れない奔放な意氣にある。この情熱、この意氣に加ふるに來るべき時代を豫感する鋭い直覺力、力めてやまぬ好學的傾向が、茲に樗牛をして獨自の世界を築きあげさせたのである。

それらの業蹟のうちに於いて、特に目立つことが凡そ三つある。それは

(一) 日清戰役に起つた國民的自覺の風潮に乘じて日本主義を提唱したこと。

(二) ニイチエの思想に共鳴して文明批評家としての文學者を論じ、美的生活、藝術的天才主義を高調したこと。

(三) 日蓮の教說を研究して新日蓮主義を力說したことなどである。

元來、樗牛は早くから日本文化乃至藝術に對して多少の自覺を持つてゐた。その事は彼が二十八年頃、『日本美術史の編纂を促す』、『日本民族の特性と文學美術』を論じ、二十九年に『古文學に對する審美的批評』、『本邦古文學の評論』『希くば俳諧の美學論を聞かむ』などの說を述べたのを見て容易に察することが出來る。彼は時々日本の缺點をも指摘したけれども、大體に於いて、日本の長所を認識し、心からそれを尊重した。

それで樗牛は當時の文學者が古文學を遺忘せる事を切に非とし、

『今日の批評家は我邦の文學に現在あるを知りて過去を忘れたるに似たり。當代末流の作者に對して毫も批評の勞を吝まざる彼等は、本邦古代の作者に對して、甚だ冷淡なるが如し。古典は春陽堂の小說よりもむづかしき也。古典は歷史を有するが故に其研究も亦深刻周到なるに非ざるよりは、前人の所說に一頭地を畫すること頗る難し。而も歷史は常に新らしき眼孔によりて解釋せられざ

るべからず。何れの時代にあつても過去は常に現在によりて通譯せられざるべからず。本邦文學史は十分の報酬を供へて新批評家の檢閲を待ちつゝあるを知らずや。」と警告し、更に彼は具體的事例を擧げて、「且つ夫れ本邦古文學知識の一般に缺乏せるは甚だしき事實なり。『クラリッサ・ハーロー』、『トム・ションス』、『ヴニテー・フェア』を口にするものにして、源語、落窪、狹衣等の筋だに解せざるものありとせば、誰か古文學研究の推奬を以て、今日の急務に非ずとせむや。」と痛言した。

樗牛は勿論、西歐文學の研究を忽諸に附してはならぬとしたが、それと共に、日本の古典文學に對する知識を缺くことは文學者の素養に不足するものとし、必然、國民的自覺の上に起つて、現代の心、現代の精神により、日本の古典文學を解釋すべき必要あることに言及した。即ち彼は『古文學に對する審美的批評』について彼の考へを披歷し、

「我邦人の古文學を評隲せるもの少からず。然れども多くは歴史的方法を主とし、著作其物に就て、純然たる審美的方法をなせるもの少し。」

と云ひ、審美學の觀點地から、新しく、わが古典文學の味を人々に知らしめんことを求めた。樗牛の言ふところは今日から見ると物足りないけれども、彼が國民的意識の下にわがクラシックの眞價を一般に知らしむべき必要を高調したところに日本精神的傾向を示してゐた。

さういふ土臺を有つた彼が、再び『太陽』の論壇によるに及び、明治三十年五月、日本主義の叫びを揚げたのは、決して唐突のことではなかつた。それに彼は二高教授の時代に『中等倫理教科書』を編し倫理研究の結果、國家主義に立脚すべき必要を感じた。そして最初、彼は社會的、哲學的に倫理を研究したのであるが、的確な歸結を見ないので一轉、現實的方面に傾き、國家主義的立脚地に進んだものと思はれる。

樗牛は政教社同人の國粹主義提唱以後における日本主義の有力な唱道者の一人で彼の先輩井上哲次郎博士を初め、湯本武比古、木村鷹太郎、竹内楠三らと共に日本建國の精神を發揚するため、大日本協會を設立した。協會の綱目は十箇條から成り、在來の國家主義にくらべると、遙かに現代的意味を加へ、幾分新しいところがあつた。今その綱目を擧げよう。

一、國祖を崇拜す。
一、光明を旨とす。
一、生々を尚ぶ。
一、精神の圓滿なるを期す。
一、清淨潔白を期す。
一、社會的生活を重んず。
一、國民的團結を重んず。

一、武を尙ぶ。
一、世界の平和を期す。
一、人類的情誼の發達を期す。

かうして樗牛等は、協會の機關雜誌『日本主義』を發行して日本主義の宣傳に力め、それへ『國民精神の統一』を寄せ、また主として『太陽』誌上で、各方面から日本主義の思想を考察說明し、極端な歐化主義の弊を責め、諸方の論難に向つて應酬健鬪した。それらを綜合すると、樗牛の『日本論』が出來る。今、樗牛の日本主義乃至日本觀に關する文篇を調べると、左の如くである。

日本主義（三十年五月）
宗敎と國家（三十年七月）
日本主義と哲學（同年六月）
福澤諭吉氏（同九月）

基督敎徒の非國家主義（同上）
愛國心を嘲罵するものあり（同上）
日本主義に對する世評を慨す（同七月）
國家的宗敎（同上）
世界主義と國家主義（同七月）
我國體と新版圖（同十月）
國民精神の統一を論ず（三十年十一月）
誰か我邦を西班牙に比するものぞ（三十二年七月）
群盲撫象（同上）
無定見の國民（三十二年一月）
國家至上主義に對する吾人の見解（三十二年一月）
新しき日本（同年三月）

時世を知らざる者の言（同年二月）
植民的國民としての日本人（同上）
國粹保存主義と日本主義（同年四月）

以上のほかにも『國民的哲學』、『彼は彼たり我は我たり』、『日本主義と大文學』、『基督教徒の逢迎主義』などの論篇もある。彼の說には矛盾あり、錯雜あり、獨斷もあり、故らに詭辯を用ひて、宗教を排斥したことなどは、その缺點であるが、國民的自覺、國民的意識を高調して、歐米盲拜の愚を難じたことは確かに時代の弊害を穿つてゐた。

（前略）日本主義は國體の維持と民性の滿足を以て、國家の獨立、國民の幸福を保全し得べき二大制約となし、此の二大制約を中心とし、核子とし、以て內外諸他の文物に對して公平なる研究を試み、是の研究の結果によりて取捨撰擇を行ひたり。故に日本の眼中には國體と民性とを外にして、國の內外なく洋の

東西なし。苟も國體民性に適合するものは、外邦の文物と雖も、是れを收容同化するに躊躇せず。是れに反して苟も是れに有害なりと認むる時は、假令ひ數十百年の間、我國に存在し發達せるものと雖も、是れを排斥打破するを憚らず。是に於いて日本主義は、內に向つては基督教と共に非國家的、非現世的なる佛教を排斥し、保守的、退步的なる儒教の一部を排斥し、外に向つて獨逸の國家社會主義を容れ、英國の功利實驗主義の一部を容れ、內外の文物に向つて縱橫の撰擇を行ひたりき。（下略）

樗牛のいふところは、餘りに抽象的にすぎ、ドイツの國家社會主義の如何なるものであるかについても、具體的說明をしないのみならず、日本主義の神髓に關しても、矢張事例を擧げ、史實にもとづくことを明かにしないのは一缺點であつた。

第二章　樗牛の後半生

一、思想上に於ける轉換

それから彼は三十四年一月に至つて、『文明批評家としての文學者』を論じ、次いで同八月、『美的生活』の一文を公にした。この論篇は當時の文壇に有力な反響を生じたのである。いづれも、今日から見ると、疎漫誇張のあとが著しく、鬼面、人をおどろかさうとした趣があるけれども、著眼の上で一頭地を拔いてゐた。文學者の職務が文明批評家たるにあるとしたことは、主として樗牛の先唱にかゝるのである。そして當時の文學者が概ね怠け者で無自覺的に盲動するのを正面から覺醒せしめようとした意氣が一般詩文人、殊に小說家らを動かした。

當時、樗牛洋行のことが決定したので、キールに留學してゐた姉崎嘲風博士の許へ通信し、

「僕は斷然渡航する、四月上旬には出發する。僕の行先はいづれ君と面晤の上きめよう。あゝ君と逢ふのも最早や二ケ月餘りだ、何たる天の惠みであらう！」

といつた。當時彼の呼吸器病は比較的よくなつてゐたのである。それで彼は洋行の決意を故郷の父にも申送つた。が、嘲風に洋行確定を告げた翌日、彼の病勢が實際よくないのと周圍の近親が、樗牛の健康を憂ひた事が主となつて洋行中止に決したのである。この時の遺憾について、樗牛は感慨深い手紙を嘲風博士に送つた。彼が帝大講師となつて、日本美術史の講座を擔當するに至つたのは、それから三月ほど後のことである。

茲に注意すべきは、樗牛が痼疾漸く進むにつれて、精神に變調を呈し來つた事である。それに就て、彼は三十四年四月ベルリンにゐる嘲風に寄書して、

「此頃の僕の精神には、此一兩年の間に醞釀し來つたかとも思はれる一種の變調が現はれて來た。人は病的と謂ふかも知れぬ、又自分でも境遇、健康等の爲めに然るのかとも思はれるが、併し僕は僕の精神の自然の發展と外信じ得られない。僕は變化を明瞭に君に知らせる事が近い内に出來るだらうと信ずるが、要するにロマンチシズムの臭味を帶びてゐる一種の個人主義たることは爭はれない。」

と述べ、現實的、功利的な改良主義の淺薄を指摘し、俗學者が文藝の慰藉敎養を輕視するの迂を笑つた。尙樗牛は宗敎問題にも言及して、

「曾ては一種の反感を以て迎へたが、今日では如何なる宗敎に對しても少くとも同情を以て見る迄になつた。あゝ吾人は自己の弱點を掩はむがために、知らず知らず自己の性情の缺如せる所の者を自己中心の信仰として發言することがないか。」

と告白した。つまり、彼の心の上に一種の新しい反動が起り、強い精神的革命の兆が頭を擡げたのである。

彼が「ロマンチシズムの臭味を帶びてゐる一種の個人主義」といつたのは、ニイチエヤズムのことと思はれるが、その前提ともいふべき文篇は『美的生活』であつたらう。彼はそれを發表する前、三十四年七月、友人登張竹風教授に通信して、

「來月の太陽に美的生活論と題するもの、隨分思ひ切つたものに候。御批評を乞ふ。」

といつた。「隨分思ひ切つたもの」と自らいつたことによつて、それが大膽の論であることを意識し、その反對の言議を生ずべきことをも豫察したと思はれる。それはよくも、惡しくも、樗牛の思想上に於ける一飛躍を表示したものであつた。また彼の進歩への過程を示す一道標でもあつた。

さて樗牛の『美的生活』の內容は素より貧弱である。けれども人間の本能的欲望を大膽に肯定して、形式道德、形式倫理に拘束せらるゝ凡庸人を警醒する上には確かに效果があつた。それに彼の美しい文辭は、その感想を傳へるについて極めてふさはしいものであつた。が、彼の論に對して賛非兩論を生じ、寧ろそれを非難したものが多かつたのは事實である。然しついで天才主義を唱へ、藝術至上を叫び、一部の青年を動かしたことも亦事實である。

以上の如く、樗牛はニイチエヤズムに立脚して、思想界の革新、文壇の改造を呼號したが、結局彼の心事は十分解せられない結果となり、心的苦悶の後、彼自身もニイチエヤズムだけでは滿足しきれなくなつて、ニイチエの超人說から暗示を得つゝ程なく、日蓮研究に着手した。それは三十四年秋のことである。この間の消息は、佐々木信綱、井上哲次郎、姉崎嘲風諸博士に與へた手紙に徵しても明かである。殊に嘲風に對しては、腹藏なく、彼の心事を左の如く告げた。

（上略）君よ、予は敗亡の身なりと云へり。げに〳〵敗亡の身也、屈辱の身也、無念の身也。思ふこと内に結ばれて、外には狂者の如く想はるゝ身也。せめて是の體軀の健かにして事に勝ゆべくむば、叶はざるまでもまた詮術あれ。今の吾身は旦暮の菜餌是れ事として、書を讀み筆を執ることだに心にまかせず、空しく青天白雲を望みて如是觀を爲すもの、あはれ敗亡の身に候はずや。年來、心甚だ穩かならず、偉人の前蹤を望みては徒に此身の力足らざることを哀しみ、さりとては斯くて已むべき身ならずとは何によりこの覺悟なりけむ、敢て螳螂の斧を揮て龍車の轍に當らむとすることしば〳〵、事敗れ心落ちて而して已む、殘るところは斑々たる創痍のみ。予が心是の如くにして日々月々老い且つ衰へぬ。世人と知友と、這般の苦惱を知る者稀也。（下略）

當時の樗牛の文氣は大いに振つたのであるが、胸中の苦惱、煩悶は到底堪へ切れぬほどであつたことが以上の手紙で知られる。が、彼は尙その意志に鞭ち、熱

情に油を注いで、『日本美術史』の研究を續けた。つぎに樗牛は日蓮の研究をはじめたことについて、左の如く述べてゐる。

（上略）日蓮上人の追懷に勵まされて、過日來其の傳記並に高祖遺文錄など繙き居候が、さても是の偉人の生涯こそ今更貴くも仰がれ候ものかな。心も言葉も中々に及ばず候。上人の人物は其の敎養を味ははでは解しかぬるふしありと、さる先輩の勸めにより、法華經等を讀み申候ひしが、げに方便、壽量二品の本義なくては日蓮上人一代の大信仰、大抱負も其の根柢を失へるに同じきこと、覺束なくも合點候ひぬ。げに遺文を讀まむものは、先づ彼れの經を讀むべきにて候べし。遺文中の開目鈔、種々御振舞鈔などは申すに及ばず。其他の消息文みな〳〵上人の傳記に對照して興會難盡。文學として見ても、上人の人物そのまゝの大發現、げに〳〵鎌倉時代第一の偉觀とや申すべき。三上氏等の日本文學史に一語も言ひ及ばざりしは、如何にもいぶかし。（下略）

樗牛の、日蓮の人物、事業、文學に對する感激は以上の如く強かつた。それは彼の不如意な境遇、ニイチエヤズムに對する多少の物足りなさ、世人の樗牛に對する言論的迫害、非難などが、彼を驅つて、自ら日蓮の偉大を仰慕するに至らしめた爲めだが、又今一つは彼がニイチエヤズムの神髄たる權力意志、天才主義、英雄主義の權化としての巨人を日蓮の人物のうへに見出した爲めだとも考へられる。それに彼の理解力、味識力の卓越が、割合に早く日蓮の心境を色心上に味はふに至らしめたことも亦與つて力があつたらう。

勿論、それには日蓮主義の權威、田中智學師及びその門下の山川智應博士が樗牛の心境に同感し、度々、研究の便宜を樗牛に與へ、また樗牛の質問に對して懇切な解答を爲したことが、樗牛の日蓮研究を助成したことを見逃すことが出來ない。何れにしても、樗牛は彼が行きつくべきところに到着し、そこに感激を得たのみならず、合せて力と安心とを得たのである。その事を三十五年一月ライプチ

ヒ滯在中の嘲風博士に通信して、

「此頃は日蓮上人の研究に身を委ねてゐる。此英雄の生活によりて吾等の弱き命の强くなる樣に感ぜらるゝ。」

と述べた。

彼の日蓮研究はニイチエヤズムの鼓吹とちがつて、寧ろ世上から善意を以て迎へられ、同情を以て見られた。同時に彼はこの年（三十五年）一月二十日、文學博士の學位を授けられた。それについて樗牛は嘲風博士に書を寄せて、

「新年に書いた僕の論文（現代思想界に對する要求）に同情する人が不思議に多い。いろ〳〵の方面から贊成の意を申込んで來る、いさゝか快よい。」

といつた。

が、彼の健康は此頃からわるく、喀血が續いた。三十五年二月、畔柳芥舟學士に送つた手紙には

「一昨日マタヤラレタ、換言すれば喀血した。こゝ三週間は何事も出來ぬ、便所へも行けぬ。」

とある。また三月七日、田中智學師に寄せた書に

「今年は梅にそむける身の、梅にも緣なからむとても兩三日前よりまた〳〵蓐上の人と相成候まゝ、仰臥のまゝに一書認申候。」とある。

かういふ風に喀血に苦められ、神經がいらだつたに拘らず、樗牛の意氣は容易に衰へなかつた。否、彼の文境は次第に妙趣を加へ來つた氣味さへあつた。

爾後、樗牛が三十五年十二月、歿するに至る迄、病苦のうちにも、筆を執ることを忘れないで、『日蓮上人とは如何なる人ぞ』『日蓮と基督』『文は人也』『日蓮研究の動機』『日蓮上人と日本國』『予の好める人物』などを書いた。就中『日蓮上人と日本國』の雄篇は氣力充實、句々光彩を帶び、死に先立つこと約半歲前の人が書いたとは思はれぬほど元氣である。彼が歿する一月前に書いた雜誌中、「今

の人は祈ることを忘れた。是れこそ今の世の最も大いなる禍といふべきであらう。」と指摘し、「人を脫して神となる、己れの小さきを悟る所以である。人のまにして神となる、己れの大いなるを信ずる所以である。」といつた言葉は眞に卓拔劃切で、樗牛が安心結定して、大往生を遂げた樣子がほぼわかる。

尙樗牛が日蓮研究によつて、彼の晩年に於ける論篇に異彩を放つたものを數へると、日蓮の文章から深い感化を受けて書いた『況後錄』及び『冠鐺日親』などがある。もし彼がもう二三年生きのびたならば、必ず或程度迄、日蓮研究を大成したにちがひない。それを半途にして、地下の人になつたのは重ね〳〵惜むべきである。

二、樗牛の思想的傾向

以上、私は樗牛の手紙日記をとほして、彼の生涯を略叙した。次に彼の文學的

業績についての一半を述べる。それには先づ彼の仕事の基調を爲した思想的傾向を瞥見しなければならぬ。それについて大體、時代を區劃すると、

（一）哲學的、詩人的傾向の時代

（二）日本主義鼓吹時代

（三）ニイチエヤズム宣揚時代

（四）日蓮信仰時代

の四つとなるであらう。日本主義及びニイチエヤズムの時代にこれを倫理的時代と呼び、日蓮信仰の時代はこれを宗教的時代と呼んでも差支へない。いづれにしても、彼の思想生活には右の如く凡そ四つの時代があつた。

樗牛の思想生活の第一期哲學的、詩人的傾向の時代は、高等學校の學生生活をした頃から帝大文科を卒業する頃まで續いた。それは彼が思想上、まだ混沌としてゐた時代で、唯主として當時の文學的傾向を追つたに留まる。けれどもそれと

共に彼の個性が思想上に投映せられてゐたことは云ふ迄もない。即ち詩人的傾向は樗牛の一生を支配した主脈で、三十三歳で歿する際までも、彼は詩人の俤を失はなかつた。彼は別段、新體詩を作り、歌俳を作らなかつたけれども、本質上一個の詩人であつた。詩情、詩思は彼の內部生命で、これあるが故に彼は青年の渴仰の的となり、また文壇の注目を喚ぶことが出來たと同時に不朽の足跡を文藝上に留めたのである。

若し彼の著作中から、詩情、詩思を除いたら、何物も殘らぬといつてよい。彼の評論も隨筆も小品も、史傳も必ずその背後に詩情が潛んでゐた。樗牛が理論を述べるときにも、尙詩的な味を失はないほど、本質的に、彼は詩人性を備へてゐた。それは彼がロマンチシズムに先驅した點に於いて、詩人的傾向のあつたことがわかる。彼はロマンチシズムの主潮に觸れた第一人者とも云ふべきで、その評論さへも或點で詩化した。無論、彼の論文のうちには只管理路を正し、論理の法

則を嚴守したところが見えるけれども、さういふ時に於いてさへ、彼を支配した主力は强き感情であつた。卽ち感情の骨に理論の肉を着けたのが樗牛一流の論文である。

以上の傾向は、樗牛の文藝評論に徵して明白にわかる。彼の言ふところには矛盾が多く、昨是今非の態を爲すことが少くないのは、本來が强い感情を土臺としてゐるからである。そのために、彼は細心精緻の論を爲すことが出來ず、往々大摑みな物の言ひやうをした。彼が作品を鑑賞するにしても、文壇の時潮を論ずるにしても、微を穿ち、細を分つ、といつたやうな行き方をしないで、いくらか概括を急ぎ、概言的傾向に墮したのは、つまり、詩人性の彼に免れ得ぬ短所であつた。

以上の如き徑路を辿つた樗牛は評論家として主觀的批評の方式を執り、往々偏見に囚はれがちであつた。彼が島崎藤村の新體詩を非難しながら、『一葉舟』に

同感したのは、彼特有の矛盾である。また彼が、ニイチエの權力意志を歎稱しながら、『平家雜感』や『清見潟日記』に、センチメンタルな傾向を示したのも、彼特有の矛盾である。が、その矛盾こそは、彼の短所であると同時にまた彼の長所である。卽ち本來、彼は詩人的であるがために、さうした矛盾を生じたので、そこに樗牛獨自の面目があつた。

それで若し樗牛を評論家とすべくば、詩人的評論家と呼びたい。また彼を學者とすべくば、詩人的學者といひたい。冷嚴、公正を旨とする評論においても彼は詩から離れることが出來なかつた。嚴に分析、歸納を旨とする學問に於いて、彼は尙詩情を忘れることが出來なかつた。事實、嚴にいへば、評論も學藝も詩を要しない。詩情のために評論の冷嚴公正を失ひ、詩思のために學問の深奥な推究を妨げることが少くないからだ。が、詩を背景とした論文の存在は無論可能であるから、樗牛獨自の世界は決して壞れぬのである。

要するに、樗牛の業績を明かにするには、彼が詩人的評論家であり、詩人的學者であつて、ロマンチシズムの思潮に終始したことを先づ以て認識しなければならぬ。詩あつての樗牛である。詩に生きてこそ樗牛の生命がある。かういふ風に考へて、彼の全集を見ないと、往々失望する箇所が少くあるまい。殊に彼の文學評論の如きは、彼の本質に照らし合せて評價せぬ場合は、興味索然たるを免れないところが多いであらう。

樗牛の思想生活の第一期――哲學的、詩人的の時代は概ね思想が熟しないのみならず、一定の見地も亦確立されてゐない。唯彼は漫然として東西哲學に憧憬を寄せ、或はセンチメンタルな文學に深く共鳴したにすぎぬ。それは彼の準備時代であつて、天才、彼の如きに對しても、それ以上多く望むことが出來ない。

彼の哲學憧憬は、既に明治二十四、五年頃から現はれ、二十七年に至つて、老子の哲學を論じ、二十八年には、『人生の價値及び厭世主義』に言及し、ついで

二十九年、『哲學的文學』『古代印度思想概論』を書いた。彼が早くから印度哲學を研究しようとしたのは、そこに深遠幽奥の哲理を味はうとした爲めであらう。彼の『印度思想概論』は試驗論文として書いたのであるが、『老子の哲學』と共に、この期に於ける彼の哲學的造詣を察すべき論文である。

が、樗牛の趣味、嗜好、素質が、より多く彼を詩の世界へ誘うたのは當然のことで、この期から既に詩的傾向が著しく出てゐた。例へば、彼が、わが文壇に「哲學的文學」の出現を要求した時すら、その言葉は詩の世界に及び、「言はずも著しきプラトーンのシンポジオンは、千古を通じて命ある哲理にして、同時に詩なり。フエドンの面影はウオーヅヲースか詩中に紛ふべくもあらず、Dansing daffodils と歌ひし是の人の感情は、ロマン派に在りては、やがてシエリングの客觀的客觀派とか呼ぶ哲學の思想に非ざりしか。バイロンのレマン湖上の曲はやがてスピノザが一元論なりと稱せられ、カインコルセールは强者の權利の主張せるもの

と說かるゝも無理にはあらず。（ルデルが詩に宿れる具體一元論を一輪の野花に擬へて、あはれ是の花、爾を知るものは亦宇宙を知らむと歌ひしはテニズンなり。」と詠嘆的口吻を洩らした。

殊に彼の文藝批評に於いて、濃厚な詩人的傾向を明かに示した。例へば『一葉女史のたけくらべを讀みて』『田山花袋のわすれ水』『文學界の諸君子に寄するの書』『女性作家に望む』の諸篇の如き、いづれも、センチメンタルな調子が强く流れ出てゐる。就中、『文學界の諸君子に寄するの書』は全く樗牛の詩情を託したと見るべきものである。今その一節を引く。

一夜雨降り風凄し。殘んの燈火を引寄せて、枕頭に近刊の『文學界』を讀む。讀みもてゆくうちに我心何となく心細くなり、世にも人にも捨てられて天地の寂しきに吾れ一人の心地して、吾は得堪へず、燈吹き消し、衣引被ぎて打臥しぬ。點滴の音、夢を繋ぎて、吾は安からぬ一夜を明かし、翌朝起き出で見れば、

『蝶を葬るの辭』てふ一篇は吾が枕頭に開かれぬ。あはれ、雨にはあらぬ怪しき斑を所々にとゞめて。（下略）

すべて樗牛が鑑賞した作品の批評は一種の抒情文となつてゐる。さういふ傾向が押詰められ、際立つて見えたのは、彼の歴史小說『瀧口入道』である。それは形式に於いて小說ではあるけれども、實質上、一篇の長篇叙事詩である。平家の哀史を歌つた散文詩篇である。文體は馬琴などの影響を受けた跡があるけれども、その辭句に裏付けられたのは樗牛の詩人的情熱である。今日、『瀧口入道』を讀んで、陳套皮相に近い修辭に失望しながらも、尙捨て兼ねるのは樗牛の詩情である。かうして思想生活の第一期に於いて、彼は哲學憧憬と詩の世界の逍遙とに生きたのである。

三、日本主義宣傳の時代

樗牛は以上の如き準備を經て、思想生活の第二期——日本主義提唱の時代に到達した。日本主義の是非は兎も角、茲に彼は思想上、一定の見地に起つて、一切の文化を批評することとなつた。樗牛が日本主義を高唱するやうになつた動機は日清戰役における國民的自覺の風潮を痛感したのによるが、また一つは彼が二十二三年頃に一時勃興した國粹保存主義の影響を受けた爲めでもあり、且つ國史について相當理解あるところを持つた所爲であらう。

當時、文藝家、思想家として知られた新人は寧ろ世界主義を高唱して、國家主義を偏狹視し、それから超脱しようとする傾向を示したのであるが、樗牛はさうした風潮を知りつゝも、進んで國民的自覺の興起を望んで日本主義を高調した。が、彼は日本主義を提唱するについて、どの位の用意をしたか、この點いくらか物足りない點があつた。例へば、彼が『古事記』に對する解釋の如き、牽强附會の氣味があつて、日本建國の精神を知つたかどうか、聊か覺束ない。例へば、日

本建國精神として『日本書紀』に傳へらるゝところの積塵、(愛)重暉、(叡智)養正(正義)の三大要目について樗牛は全く知るところがなかつた。それに八紘爲宇の理想をも知つてゐなかつた。さういふ重要點に考へ及ばないで、日本主義を唱へるのは、用意の上に足らぬ所がある。けれども年壯氣鋭の彼は只管、國民的自覺の精神を旺んならしめようとして敢然、日本主義を唱へ、それによつて、一切の文化を批評しようとしたのである。

樗牛が初めて日本主義に關する主張を『太陽』誌上に發表したのは、明治三十年五月のことである。彼は劈頭、莊重の態度を持して、

「熟々本邦文化の性質を考へ、宗教及び道德の歷史的關係を審にし、汎く人文開展の原理に徵し、國家の進歩と世界の發達とに於ける殊遍相關の理法を認め、更に本邦建國の精神と國民的性情の特質とに照鑑し、我國家の將來の爲めに、吾等は茲に日本主義を唱ふ。」

と宣言した。が、主情的、感性的傾向を有する彼は、以上の宣言を具體的に明かにせず、唯彼の脱線とも見るべき宗教排擊について頻りに云々した。

彼の文辭は巧妙であるが、その內容は存外乏しかつた。當時二十七歲だつた彼としては、實に止むを得なかつたと思ふ。彼の宗教排擊は現世に利するところなしといふにあるが、これ素より皮相の見解である。「三界は佛國である、一切の衆生はこれ皆わが子である。」といふ佛陀の言葉を知るならば、佛教を排することが出來ぬ。煩惱卽菩提の妙趣を知るならば佛教を輕視するわけにゆかぬ。人生が過現未にわたり、現在のみに支配せらるゝものでないことを意識するならば、佛教を責めることが出來ぬ。ところが、樗牛は佛教には、大乘と小乘があり、大乘は卽身成佛の意義を人々に教へ、現世の幸福を與ふべき根本の旨を有することに考へ到らず、更にそれが日本化したことをも考への中に入れず、唯漫然、功利主義、現世主義の上から、佛教を斥け、進んで、クリスト教をも排した。それら

は啻に宗教の意義を無視したに留らず、偏狹、獨斷の傾きを免れない。

以上の如き缺點はあるが、彼の日本主義提唱は必ずしも無意義ではなかつた。たとひ建國精神を明かにしなかつた手落ちはあるにもせよ、日本國民の性情が傳統的に生々光明及び淨潔を尙ぶとしたのは適切な解釋である。且つ世界文化の進運に合致してゆくため、日本人が悉く國民的自覺の下に團結し、發展せんことを希望したのは頗る要を得てゐた。更に樗牛が文學と國民性について考慮した點も創新の見ではないが、文學者の反省を求むべき好個の題目たるを失はなかつた。それに樗牛が歐米盲拜の弊を矯めようと力めたことも時宜に適したのである。

けれども樗牛の論述は建國精神の發揮、傳統性の闡明よりも、より多く宗教排擊に傾き、抽象的な感情によつて、徒らに論敵を增したのは得策でなかつたのみならず、餘りに日本主義の宣傳に急で、自家の缺陷、弱點を忘れた嫌ひがあつた。樗牛の善戰建鬪を續けしにも拘らず、彼一流の日本主義運動が割合に早く短命に

終つたのは、人生の一大事たる宗教を手強く否定しようとしたところに根ざしたと思ふ。

當時、樗牛らが唱へた日本主義に對して、世界主義を唱へ、日本主義派の偏狹、排他を難じたものが少くなかつた。『國民新聞』『世界之日本』『六合雜誌』『新世紀』などは日本主義の缺點を攻擊したが、就中、『六合雜誌』は鋭く樗牛らに肉迫し、

『余輩は帝國文學記者と共に、所謂日本主義を解して、唯我國民としての實踐道德の一部を支持するものとなさんと欲す。斯く解するが故に、余輩は彼の一派の人士が古典に得手勝手の解釋を下して輕佻たる國自慢の心に媚び、稚驕の心を煽り立つるを以て時務を知らざるものと爲す。かかる大言壯語は是れ現時の我國民に與ふべき誠實なる忠告といふべからず。』

と述べた。恐らく、それは大西操山博士の執筆したものであらうと思ふが、確

かに日本主義の一缺點を穿つてゐた。

蓋し世界主義の一派は世界を中心として日本を眺め、時折國際關係に留意するのみならず、歐米の大勢に順應すべき必要を重視したのである。その甚だしく極端な一派は、只管我を曲げて歐米の大勢に盲從しようとした。ところが、日本主義は日本を中心として世界を眺め、歐米の大勢に注意しないのではないが、わが國體、國性を重視し、毫も歐米に盲從するの必要なしとしたのである。この點はよかつたが、佛教、クリスト教を極端に排斥する一點に於いて到底偏狹を免れなかつた。畢竟、日本主義と世界主義とは相俟ち相依り相助けて、そこに正當に進むべき道を開くべき必要があつたけれども、當時は互ひに無暗に反撥し合つたのである。

それから當然、日本主義の身方をしなければならぬ『日本新聞』では建部水城（遯吾）の論說を掲げ、

「日本主義は概ね往年の國粹保存主義の思想を繰返した丈のものでこれを新しい衣裳の下に開陳するのは陋とすべきである。」

といふ旨を論じ、日本主義を罵倒した。

かう云ふ風に日本主義は四方から攻撃せられたが、その勢力は一時決して侮ることが出來なかつた。それは當時、日清戰爭の勝利によつて、わが國民的自覺の精神が一般に勃興したと同時に、國體國性についても漸く考慮するやうになつてゐたからである。折柄、井上哲次郎博士らが國家主義の立場から、クリスト敎、佛敎の何らわが國を益しないことを論じて、思想界に一波瀾を捲起したが、この事も亦一面に於いて、日本主義に氣勢を加へたと思ふ。

以上によつて、樗牛の日本主義思想はほぼ明瞭に看取せられる。彼がこの機會に乘じ、更に日本主義的文學の出現を促さうと考へ、『小說革新の時機』（非國民的小說を難ず）及び『曲亭馬琴』などの論文で、作家が國民的自覺の上に立ち、

國民精神を代表した小說を製作せんことを要求した。その所論の要旨は、日本國民の性情を滿足せしむべき現世的、道義的傾向を具有する小說を書けといふにあつた。即ち武俠の精神などを具體化した小說を出せよといふのが樗牛の主要目的であつた。いふ所、單調疎漫ではあるが、極端に歐化した小說の反省を促さうとする上に於いて、彼の提言は無意義でなかつたやうである。

四、ニイチエヤズムの時代

樗牛の思想生活の第三期――ニイチエヤズム鼓吹の時代に這入ると、彼の思想が日本主義時代の道學的なのに對して、全く一變したことに驚かされる。若し彼の性情を解しないものが、卒然樗牛のニイチエヤズム提唱に耳傾けるならば、「樗牛は全く豹變したのだ、變說したのだ。」と誤解するかも知れない。けれども本質上、詩人的な彼が、かうした思想上の變化を爲したのは毫も怪むに足りない。が、

唯「詩人的」の三字によつて、彼の思想上の變化を解釋するのは、なほ一膜を隔てゝ物を見るの感なきを得ない。

蓋し樗牛は日本主義提唱以來、殆ど三年間、道學的傾向を追うて、忠實にその主義の宣傳に力め來つたのであるが、それらの間に彼が次第に看取したのは、教育家學者らが煩瑣學風に囚はれて形式的道德、形式的倫理、形式的講學に墮してゐる弊風の甚だしいことであつた。樗牛はこの點に大きい不滿を抱いたので、三十三年七月、「煩瑣學風」の題下に於いて、左の如く手きびしい論難を形式主義の學徒の上に加へた。

歐羅巴中世のスコラスチック派の哲學をば煩瑣學派と譯すること行はれたり。されど、吾人を以て見れば、今の我邦の學風ばかり是の煩瑣てふ文字を稱へるは無し。容易しき事柄を難かしく言ひ立つるをば學問と心得る、煩瑣學風に非ずして何ぞや。常識を無視し、ひたすら文字論理の末に拘泥して故らに融

通會心の道を杜絶する。煩瑣學風に非ずして何ぞや。吾人は是の煩瑣學風が方今我が思想界の一大勢力となりつつあるを見て、轉我が學術の前途を危ぶむの情を禁ずる能はず。

是の如き煩瑣學風は動もすれば趣味を沒し、常識を沒し、亦た動もすれば、人生の大本に對して其の統一的存在を打破するの恐れなり。其の結果は方便主義となり、形式主義となり、ナショナリズムとなり、フキリスチズムと爲る。是の學風に感染せる人は、手足に缺くる所こそ無けれ、其の心は片輪也。今の世の道德學者、教育學者の多くが、かゝる片輪の徒なりとせば、洵に嘆かはしき次第ならずや。心あらむもの、須らく反省熟慮する所あるべし。

樗牛は右の如く、衒學主義形式主義の學徒を難じ、その心的傾向に附着するいろ〳〵の缺點を指摘した。更に彼はさうした弊風を救ふには、文學上、ロマンチシズムの運動を起すべき必要あることに言及し、

「煩瑣學風の弊風を救得べき一の大なる勢力は何れの時代に於いても文學者の手腕にあり。今世紀の初めに於けるロマンチック派の主動者は何れも詩人なりき。されど若し今の我邦の文學者に是の事を責むるならば、そは迂濶の極みならむかし。」

と述べ、進んで日本のバイロン、日本のハイネの出づべきことを勸めて、

「學術上に於いて煩瑣學風行はれ、德敎上に於いては形式主義行はる。正しく是れロマンチック運動が思想感情の自由の爲に興るべき秋ならずや。今の世にバイロンあらば、其の惡魔の如き力を提げて起つべき筈也。若しハイネあらば、其の毒蛇の如き舌を揮つて罵るべき筈也。今の時世に於いて一人の文學者らしき文學者、詩人らしき詩人を有せざるは、日本國民の大不幸と謂ふべき也。」

といつた。樗牛のいふ所は疎放で、稚氣を帶びてゐるが、そして少し高慢くさくはあるが、眞實、彼は時風を慨いてロマンチシズムの文學が大に起らんことを

心から熱望したのである。

以上によつて、樗牛が日本主義運動から漸次離れ、心中大動搖を生じて、人生の大本、道義、倫理の眞生命は何かといふことについて考へはじめたことがわかる。茲に早くも、彼の轉機が伏在してゐた。その際、彼が手にしたのが、ニイチエの著書である。それはいつ頃讀んだか、はつきりわからないが、多分三十三年夏秋の頃であらうと思ふ。ニイチエを知つた事は、樗牛に取つて、一個の會心事にちがひなかつた。

當時、わが國では、ドイツ哲學が流行して、三十二年頃、『哲學雜誌』『早稻田學報』などで、ニイチエの一面を紹介してゐた。樗牛は稍遲れてニイチエに接し、深く傾倒するに至つた。蓋し個人主義の哲學は、ニイチエに先立つて、マスク・スチルナアの名で知られてゐるヨハン・カスパル・シュミットが早く個人主義を唱へ、キャールガアルドが自我主義の哲學を組織したのであるが、樗牛が特にそ

れらを擱いて、ニイチエに深く心醉したのは、その詩的熱情が、樗牛の詩人的素質と一致した爲めであつたらう。

蓋し樗牛は閲歴、體驗、學識などの上で、素よりニイチエに及ばぬのは云ふ迄もないが、その詩人的性情に於いて、ロマンチックの傾向に於いて、煩瑣學風に慊らぬ點に於いて、形式本位の文明を咀うた點に於いて、双方相共通したところがあつた。それで樗牛が、ニイチエの思想に接して飜然、日本主義を抛ち、ニイチエを讃嘆するに至つたのは、怪むに足りない。今迄思想的に行詰りを感じた樗牛は、茲にその前途に當つて新しく歩むべき路を見出したのである。即ち彼が友人に向つて「ロマンチシズムの臭味を帶びた一種の個人主義」と呼んだ處に新しい世界が濶然開けたのを感じた。

それは彼の云ふ如く「一種の變調」にちがひないが、この變調に推移しなければ、彼の思想生活は一時萎靡したかも知れない。が、一種の變調——國家主義から個人主義へ、道德主義から超道德主義へ、禁欲的傾向から本能的傾向へと驀進したのは、是非善惡は兎も角、過程上樗牛の思想的飛躍として注目すべきものであつた。かうして樗牛は、三十四年一月の『太陽』誌上『文明批評家としての文學者』を掲げ、ついで、その年八月、『美的生活を論ず』の一文を發表したのである。

樗牛が『文明批評家としての文學者』を執筆するについては、ニイチエを研究すると同時に、チーグレルの『ドイツ十九世紀文明史』などを讀み、深く感銘を得たらしい。右の論文は確かに樗牛に取つて劃期的なものだ。その心内に起つたスツルム・ウント・ドランクを文壇、學界へも波及せしめようとしたのである。蓋し當時の文壇、學界の形勢は確かに平凡に墮し、形式に囚はれ、皮相、淺薄に流れ共にスツルム・ウント・ドランクによつて更生することを要したのである。即ち樗牛は何人よりも早くそれを豫感し、ニイチエ讃嘆の聲を揚げてロマンチシ

ズムを高潮し、何物かを文壇、學界に寄與しようと意圖した。かうして楊牛はニイチエの哲學に親しみ、左の如く論述した。

（上略）ニイチエは殆どあらゆる方面に於いて十九世紀の文明に反抗せり。哲學界に於いてはヘーゲル以來、科學界に於いてはダルヰン以來、一代の思想を殆ど殘り無く風靡し來りたる歴史（ヒストリスムス）發達說も、彼れの眼中には僞學者の俗論に過ぎざるものとなれり。以爲らく、十九世紀末の吾人は歴史の多きに勝へざる也。主觀を沒し人格を虐げ、先天の本能を無視するものは歴史也。個人自由の發達を妨げ、凡ての人類を平凡化し、あらゆる天才を呪詛するものは歴史也。——彼れは是の如き論據より多くの學者を嘲りて僞學者（ヒルツングスフリヒステル）と呼び、「凡ての活力あるものの障礙、凡ての疑惑に沈むものの迷信、凡ての弱者に對する道德家、凡ての高きに向つて進むものの足枷、凡ての清新なる生命を望みて進みつつある獨逸人の前途を阻害する沙漠」は卽ち僞學者なりと罵り、『新舊信仰』の著

者たる博士ストラウスの如きは是の如き僞學者の好標本として標榜せられたりき。是の如く人格の獨立の爲に歴史發達論を否定したるニイチエは、更に論步を進めて民主主義と社會主義とを一擊の下に破碎、揚言して曰く、人道の目的は衆庶平等の利福に存せずして、却つて少數なる模範的人物の產出に在り。是の如き模範的人物は卽ち天才也、超人（ユベルメンシュ）也。卽ち是れ無數の衆庶が育成したる王冠とも見るべきもの也。されば若し衆庶にして、自ら自己の爲めに生存すと思はば是れ大いなる誤り也。彼等は唯々是の如き天才、超人の發生を助成する限りに於いて其の生存の意義を有するのみと。——彼れは、是の人道の理想を認めず、却つて是に背馳せる方針に出づるの故を以て今の社會、國家、學術の凡てを非認し、飜つてルソー、ゲーテ、ショーペンハウエル、ワグネル等の人物を擧げて眞正なる文明の指針是に在りとなし、所謂超人は學者に非ず、識者に非ず、又歴史的に發生し來れる如何なる人にも非ず、實に是れ一個の藝術家、

創作家なりと斷じぬ。彼れの說は是に到りて現時の民主平等を根本的に否定し、極端にして純粹なる個人主義の本色を發揮し來りたるを見る。（下略）

是に於て吾人は文明批評家（クルツールクリヂカル）としてのニイチエが偉大なる人格を歎美するを禁ずる能はず。彼れは個人の爲めに歷史と戰へり、眞理と戰へり、境遇、遺傳、傳說、習慣、總計の中に一切の生命を網羅し去らむとする今の所謂科學的思想と戰へり。徒らに外面皮相の觀察を事として精神的生活の幽微を解せざる今の心理學と、認識論の如き一部煩瑣の研究に陷りて、本能と動機と感情と意志とを遺却し去りたる今の哲學には、彼れの所謂僞學として排斥する所也。彼れは青年の友としてあらゆる理想の敵と戰へり。彼れは今のあらゆる學術の訓へ得るよりも、更に〳〵大なる實在の宇宙に充滿するを認めたり。同時に是の實在を認識し、其の秘密に到達せむには、今の所謂學術道德の甚だ力無きを認めたり。（下略）

彼のニイチエ讃嘆はどう見ても極端に流れて、却つてその極意を閑却した氣味があるが、一つは彼がニイチエを藉りて、彼自身の日本思想界に對する反抗と不滿とを暗示するに急であつた爲めかと思はれる。彼は尙進んで、トルストイ、イブセン、ゾラ、ホイットマン、などが文明批評家としての職能を全うしたことを述べ、日本の文學者が彼等の前に於いて、餘りに低劣淺薄であることを非難した。蓋し彼は、當時の小說戲曲などに社會批評もなく、時代の文化に對する判斷もなく、生活組織に對する批判もないのを大なる遺憾とし、ニイチエの如く、偉大な文明批評家の出現せん事を要求したのである。

かうして樗牛は、一時ニイチエヤズムの鼓吹に熱中し、『嗚呼凡俗改革』の題下に實用主義（功利主義）に囚はるゝ一切の改革を否認し、進んで文藝、宗敎の威力を高潮して、

「嗚呼今の改革は文藝宗敎を度外視せり。國體の外に趣味なく、功利の外に理

想なき今の凡俗者流の云爲としては素より怪しむを要せざらむ。――人生本然の要求を無視して何處にか教育あらむ、何處にか道德あらむ。」

と叫んだ。かうして彼の言葉は、四年前、日本主義を宣傳した人とは思へない程で啻に國民主義から個人主義に移つたばかりでなく、功利主義から藝術主義へ、無宗教主義から宗教主義へ移つたことを明かにした。それらは樗牛の內部生活に於ける進歩を示すと同時に、合せて虛僞虛飾から眞實本然の世界へ移らうとする一過程たる事をほのめかした。然し彼の言ふところにまだ周到を缺く點のあつたことを認めなければならぬ。卽ちそれは極端から極端に赴いた傾きがあるからだ。

五、美的生活の提唱から日蓮主義へ

この當時、國家主義思潮は漸く衰へ、それと共に人生問題を考慮しはじめた風

潮が漸次昂まらうとしてゐた折柄、樗牛が論壇の反對を慮りつつ、思想上、ニイチエヤズムを强調して發表したのが、『美的生活を論ず』(三十四年八月)の一文である。

彼の美的生活提唱は、その創意から出たものならば、確かに痛快奇拔に價するが、さうでなく、唯ニイチエヤズムの延長にすぎぬ。卽ち彼はニイチエが、クリスト教的な禁欲主義を虛僞として斥け、且つ獸性(Brutale)を重んじ、本能を尙んだところに暗示を得たのだ。かうして樗牛は本能の解放――性欲の自然的解放を主張して、そこに自我の滿足を得ることが人生上、意義があると考へた。それは彼の創意でないとしても、當時のフィリステル的な考へで性欲を解釋しようとした道學者らの偏見を打破る上に於いて、意義なしとしなかつた。勿論今日、彼の『美的生活論』を讀むと、幼稚低級の嫌ひはあるが、華やかな文章を以て、强い熱情を以て、誇張したる言葉を以て、

「美的生活は人性本然の要求を滿足するのだから、その生活それ自らに於いて既に絶對の價値を有する。」

と獨斷したところに青春の人々を動かす魅力があつた。要するにそれは一種の詩だ。論文の形式に託して樗牛の本能滿足說を歌つた一篇の散文詩である。乃至形式道德、强ひられた慣習的道義への反抗である。

その他、樗牛は美的生活の高調と共に、個人主義の一要件たる天才主義を力說し、凡俗主義に反抗した。凡俗主義はこの世に益なく、天才主義はこの世の救ひであるといふのが樗牛の見解で、無論それはニイチエヤズムの一面であつた。彼は『天才の出現』に於いて

「我れは天才の出現を望む——久しいかな、我れ人の凡人に倦めることや。」

といひ、『天才の犧牲』に於いて、

「世に凡人の數、幾十百千萬倍ありとするも、人類に於いて何の益する所ぞ。願はくば彼等の十萬を割いて、一バイロンを得む。願はくば彼等の一百萬を割いて一奈翁を得む。我れに一日運を與ふるものあらば、願はくば代ふるに一千萬人の凡人を以てせむ。我れに一釋迦を與ふるものあらば、一億萬亦惜しむに足らざらむ。」

と云つた。以上によつて分明であるが、樗牛の天才主義は貴族的、非庶民的であつた。天才主義を詩的に解釋して、社會の存在、大衆の存在を忘れ、人類個々の價値を極度に輕視した。玆にも樗牛の詩人的傾向が、はつきり浮び出てゐる。その矛盾、その缺陷は正面からこれを難ずるにも及ぶまいと思ふ。が、彼の天才主義の高調は無意義ではない。新時代に適しない舊道德。舊習慣に囚はれず、功利主義の奴隷とならないで、自己の權力意志を自由に體現し得べき天才の出現を文明のために必要としたニイチエの眞意を傳へたところに、時人の反省に價すべきものがあつた。蓋し、歐洲文化は餘りに行詰り、餘りに頽廢した機構上の缺點

が多く、根本的に一新を要したのだ。茲に氣づいたのがニイチエである。

右の如くニイチエヤズム鼓吹に努力した樗牛の言論に對し、文壇では贊否の聲が高く起つた。樗牛に身方して、ニイチエ紹介に力めたのは、時の『帝國文學』記者登張竹風教授であつた。また樗牛のニイチエヤズムに極力反對したのは、倫理學研究に沒頭してゐた坪内逍遙であつた。逍遙は匿名の下に『馬骨人言』を『讀賣新聞』に發表し、倫理學者としての立場から、ニイチエが思想上、反動の兒であること、その言説に矛盾缺陷が多いのを指摘した。それは、大體穩當な見解に滿ちてゐたが、樗牛のそれに答へたところを見ると、罵詈に滿ち、不眞面目に流れてゐた。蓋し、餘りに感情に激して自家宣傳に忙はしかつた爲めであらうと思ふ。當時、竹風は依然、樗牛に身方して、早稻田派の一部に人身攻擊を加へ、理論上から堂々、爭ふことをしなかつたのは、ニイチエの英雄主義を裏切つた形があつた。

けれどもさうした小さい缺陷は別として、樗牛のニイチエヤズム鼓吹は、人生を思索して、懷疑に陷り、或は倫理思想上、行詰つたものゝ行くべき道が、個人主義でなくて、宗教の門にあることを暗示した。現當の我を生かして、意義ある生活を造るには、どうしても宗教に生きねばならぬ。それを除いて差當り行くべき道がないといふことが茲に若き人々の間にも了解せらるゝに至つた。

思想上、青年に與へた樗牛の影響は右の如くであるが、更に文藝上では、ロマンチシズムの傾向を強め、文壇人に向つて、情熱、憧憬、空想、理想などの幻影を投射し、古い美から新しい美へ、舊生命から新生命への轉向を促した。また文藝上、渾沌として暗中模索の形を續けつゝあつた人々に、個性の發揮、自我の擴充、文明批評の必要を教へ、沒個性、沒自我、平俗、凡庸にして生活批判なき文學の無價値を自覺せしめることにつとめた。以上の意味に於いて、樗牛のニイチエヤズム鼓吹は缺點、弊害はあつたが、一方效果も相當あつたことを否むわけに

ゆかないのである。

が、樗牛自身の心境は當時どうであつたか。彼は三十四年一月以來、ニイチェヤズムのために健闘して、文壇注目の的となり、意氣横溢の概を示した外容の割に、心的生活に於いては安心を得ず、動搖に次ぐ動搖を以てし、思索に次ぐ思索を以てし、深く内部生命に掘りさげてゆかうとして、始終波立つてゐた。かうした間に於いて、彼は殊に宗教に憧憬した。このことを證據立つるのは三十四年六月、姉崎嘲風博士に與へた手紙である。

（前略）「人は兎に角生死の間に出入すると、人生の趣味もいくらか分る樣だ。此頃は宗教（僕の）に關して思念することも往々ある。同時に僕の個人主義とでも云ふべきものが一層明瞭になつた。ドーモ日本主義時代の思想が、僕の本然の皮相なる部分の發表に過ぎなかつたことが今から思はれる。（下略）

といつた。ついで樗牛は同年七月、嘲風に通信して、

「此頃僕は妙に Sentimental になつて、僕自身もドーモ抵抗が出來ぬ、此の一年間程、多忙なる精神的生活を經驗したことなどが今迄無い。」

と述べ、樗牛が思想上、形式から本質へ、外部的から内部的へ、合理主義から主情主義へ移つたことを告げた。

蓋し樗牛が肺疾に苦み、死生の間を往來して病床に横はりつゝ人生問題を考へるに及び、自ら彼の思想生活の上に大きい變化をもたらしたのである。それが在來、形式的、外部的、合理的傾向を追うた彼をして内省せしめ、凝視の眼を心の上に集めて、茲に本質的、内部的、主情的に人生を考へ、自己を考へ、合せて文藝の諸問題を考へようとするに至らしめた。この心的推移は外側から見ると唐突なやうであるが本質上、詩人的性格を備へた彼にあつては、自然すぎる程、自然であつた。

樗牛が内部生活に傾いて頻りに精神上の慰藉を求め、有限の世に無限の生を追

はんとし、ひどく精神的饑渇を續けてゐた際、その天才主義乃至超人憧憬のうへから、自然に逢着したのは、宗教上の偉人日蓮である。

惟ふに樗牛の日蓮崇拜は最初、その端を天才主義の謳歌に發したのであるが、また一面から考へると、彼が靈的生命に饑ゑ、何とかして自己の魂を安んずべき土臺を得ようとあせつたことにも依る。言ひ換へると、彼は宗教上に於ける信仰の基礎を得て、有限の生のうちに無窮、永遠の生に滿ちた意識に終始しようと欲したのである。即ち樗牛は宗教的法悦三昧に入らうと渇望したのだ。

さういふわけで彼は先づ日蓮の人物、文章に接し、次第にそれに引き入れられ、一種の歡喜を體驗したが、更に田中智學師の『宗教の維新』を讀んで、日蓮崇拜の念を強め、三十四年十月、之が研究のため鎌倉に移つて、專ら日蓮認識のうへに沒頭するに至つた。それは樗牛の思想生活に於ける第四期を形造つたのである。

いづれかといふと、樗牛の日蓮研究は、教學方面を閑却して、唯日蓮出現の意義及びその人物、文章を究めたのに留り、なほ今後、彼の研究を要すべきものが多くあつた。が、彼の短命は、彼をして研究上深入りすべき時日を彼に與へなかつたのである。それで彼の日蓮研究については、素より多くを望むことが出來ない。

本來、日蓮を世に紹介するには、先づその教義を精細に叙述しなければならぬ。教義は日蓮の根本生命である。が、この點に於ける樗牛の研究は未だ十分、その眞諦に觸れるところ迄ゆかなかつた。秩序的にも、教義の大綱を了解するところ迄達しなかつた。蓋し樗牛はさういふ方面の解說を得意としなかつた。いづれかと云ふと、彼は日蓮の人物、文章及び日蓮と日本國との關係を考へる方に急ぎ、すべてが大まかだつた。

が、彼一流の新しい考へと新しい見方とによつて、何人にも分るやう日蓮の面

目を紹介したことは、確かに異彩を放ち、世の注目を惹いた。殊に彼の論述は、宗門の人々に解せらるゝよりも、より多く門外の人々に日蓮を紹介しようとする目的によつて、何人にも理解し易いやうに書かれた。在來、日蓮の眞相は、宗教に關係を持たぬ人々に不可解の謎とさへ思惟せられたが、樗牛の日蓮讃仰によつて、はじめて宗外の人々にも強い感激を與ふに至つた。そこに樗牛の特色が見えるのである。

かうして樗牛の日蓮紹介は、文學上から見た日蓮、事蹟の上から見た日蓮に留まつてゐて、眞に日蓮の全面容を闡明するところ迄到達しなかつた。宗門の人々から見るとそこに不滿足な點が相當にあるのは素より致方なきことである。けれども樗牛の日蓮に對する崇敬、熱情、渴仰、讃嘆は彼の文章に一種の生氣を加へ、何人をも彼の考へた通り考へさせ、彼の感じた通り感じさせなくてはやまぬ力がある。そして世人が兎もすると、日蓮を誤解する一因とした折伏主義についても、

樗牛は皮相的にそれを解釋しようとしないで、日蓮の折伏が眞理闡明の大慈大愛の心から出たものであることを確言した。それほど樗牛はある方面ではよく日蓮を理解した。

それについては『感慨一束』(姉崎嘲風に與ふる書)のうちに日蓮の折伏主義に對する意向をかう洩らしてゐる。

(上略)そも〳〵日蓮の立場より見れば、其の嚴烈なる折伏は、廣大なる攝受の準備として、一種の慈悲の發表として見るべきものには非ざる乎。吾等の見る所によれば、個人としての日蓮は眞に慈悲深き人なりき。所謂柔情俠骨並び具るとは眞に彼れに於いて見る所の性格にて候ひき。さりながら既に天下の民衆に對し、妙法弘通の大導師として立ちたる彼れは、妙法的理想に基きて是の民衆を改造せざるべからず。彼れは釋尊に對する絶對的歸依の結果として法華爾前の諸宗門を邪敎と斷じ、隨つて其の謗法を破摧するを以て濁世救護の第一

事と爲しぬ。是れに於いてか其の事業の第一着手とした嚴烈なる折伏の要を見る。所謂自然の勢には非ざるべき乎。折伏は攝受を豫想してこそ初めて意味もあれ、攝受は卽ち慈悲の用に外ならず。卽ち日蓮の宗義よりして見れば、大なる折伏は大なる慈悲を待つて初めて現れ得べきものには非ざる乎。（下略）

この文章は『樗牛全集』に三十四年八月の執筆としてあるが、それは誤りである。と云ふのは、樗牛がその中に「先頃、本誌（『太陽』）に掲げし『日蓮上人と日本國』てふ拙論。」といつてゐて、同篇が三十五年六月に出たのを見ると、勢ひ『感慨一束』が三十四年八月のものではなくて三十五年八月の執筆であると解しなければならぬ。でないと、樗牛が折伏主義をかく正しく解する迄に至るまいと思ふ。

要するに、樗牛は日蓮研究の中途に斃れ徹底的な考察を爲すまでに至らなかつたが、而も彼はそれによつて若き人々に日蓮の特色を知らしめ、合せて病める彼

が自身も日蓮を渴仰し追想することによつて靈的に大きい力——宗教上の安心に近い慰めとよろこびとを得て、靜かに世を去つたのであらう。かくしてニイチエヤズムではまだ心の惱みを去る事が出來ずに動搖し續けてゐた彼も日蓮主義の門に入つて、玆に一種のエクスタシィに逢着し、前途に光ある道を認め得た。このことは彼の幸ひであると同時に、日本思想界に取つても亦幸ひであらねばならなかつた。

六、樗牛の評論、史傳、抒情文及び學術的著述

在來、幾度も繰返していつたやうに、樗牛は本質上、詩人である。文壇にロマンチシズムの傾向、思潮を鼓吹した一方の驍將である。彼は若々しい情熱を生命とし、すべての事物を主觀的に解釋した。さういふ點から考へると、彼は嚴密な意味に於いて評論家に適しない傾向を持つたといへよう。が、それにも拘らず、

彼は評論家として起つた。それは彼に取つて、全く不適任であつたかといふと、必ずしも左樣でない。彼は博文館の『帝國百科全書』に於いて論理學を擔當、執筆したほどで論理に暗くはなかつた。それで彼の考へを或程度迄、理論的に取纒める能力は相當にあつた。が、彼には更に論理的頭腦よりも、情感的頭腦の方が有力で、ともすると、情感を先入主として理智の作用を抑へ付け、或は獨斷に流れることが少くなかつた。卽ち感情がより强く樗牛を支配して、往々、偏見、矛盾の方向へ樗牛を導いたことがある。

それで樗牛の評論は一見、論理の筋道を正してゐる風があるけれども、事實、彼の感情を土臺としてゐるがために、文藝作品の批評などは、彼の好惡の感じによつて著しく上下せられた氣味がある。例へば、センチメンタルな作品で比較的見るべきものは彼の推奬を得たけれども、澁味ある作品、老巧な作品は割合に樗牛の認むる所とならなかつた傾きがある。例へば、彼は紅葉の『多情多恨』が一

代の傑作とすべき價あるに拘らず、それに對して冷淡であつた。また花袋の『重右衞門の最後』は自然主義の先驅として、當時に於いては樗牛が推讃した『わすれ水』以上の意義を有したけれども、それに對して、樗牛は冷やかであつた。而も今日から見て粗硬の感ある『天地有情』(晩翠作)を激賞した如きは、解すべからざることである。

殊に一層解すべからざるは、獨步の『武藏野』に對する樗牛の態度である。それは三十四年三月に公にせられて、平生彼が黨派心から憎んだ『新聲』記者の賞讃したところとなつた際、一言も獨步の藝術を推讃しなかつたのは何故であらうか。蓋し獨步の作品は樗牛の嗜好に適せず、自然主義的妙味ある小說は、樗牛の解するところとならなかつたのだ。かう云ふ風に文藝作品の批評に於いて樗牛は餘りに主觀主義に傾いたので、彼の秀拔の才を以てしても相當成功を收め得なかつた氣味がある。

また樗牛は常に文壇に對して大文學の出現を要求し、作家の必備條件について、再三、種々の希望を開陳したが、その言ふところは概ね抽象的で具體的ではなかつた。彼は一見、壯とすべき言辭をならべただけで、內容は寧ろ空疎の感がある。唯彼が文藝評論家としての長所とすべきは、嚴肅、純正、清新の文學を要求し、文學者が文明批評家たらんことを望み、或は時々、文壇に新しい問題を提供して、逍遙などと論戰を交へ、評論界を刺戟した上にあつた。以上の如く、樗牛は文藝評論家として、その圓熟を今後に期すべき人で、生前に於いては生硬の域を脫しなかつたのである。けれどもニイチエヤズム鼓吹、日蓮主義宣揚のことは、たとひ彼の言ふところに備はらぬ點がありとしても、時代に先驅する豫感と熱情とによつて、文壇を動かし、思想上に貢獻した。それらを思ふと、樗牛の評論は一方に偏した缺點はたとひあつても、大膽、率直な態度に於いて、他の模すべからざるところを持つてゐた。

それに樗牛の評論はその視野が廣く、文藝の天地にのみ跼蹐しないで、美術、文學、教育、宗教、哲學、社會などの各方面に亙り、論評を加へたことは、確かに彼の特色であつた。彼とほぼ對立し得べき上田柳村（敏）は主として文藝にのみ眼を向け、教育、宗教、哲學、社會などには、評論を加へなかつたが、樗牛は教育についても一見解を持し、宗教、哲學についても、相當の注意を拂ひ、更に社會方面にも多少の觀察を加へることを怠らなかつた。それで彼の評論は單調に陷らないで、題目に變化があり且つ問題に富み、暗示性を持つて讀者の興味を惹起すべき力があつた。

殊に樗牛が短言を以て彼の所感を述べたものゝうちには、獨自の鋭感がダイヤモンドの如く閃き、能く人の肺腑を抉るやうな味を持つたものが少くない。唯社會問題や大衆の生活について彼が風馬牛的であつて、寧ろ金權者流の身方、貴族の身方たるの觀があるのは彼の本意でなかつたらうが、物足りない。要するに、

樗牛の評論は生前重んぜられた如く權威あるものでないが、文壇の狀勢を明かにする資料として有力である。

つぎに樗牛の史傳は、彼の餘技だが、『菅公傳』『ナポレオン三世』など相當に纒つたものがある。けれどもこの方面に於いて、眞に彼の特色を發揮したのは『平家雜感』や『清盛骨相考』『ハイネが事』などの小篇の上にある。それらも今見ると、彼一流の好みに偏り、ロマンチックの世界に囚はれすぎた氣味がないでもない。

それから樗牛の學問的著述は、『世界文明史』『近世美學』『日本美術史未定稿』などがある。その他、『樗牛全集』第一卷に收めた『美學上の研究』などは、すべて彼の學術的論文と見て差支へない。それらは能く纒つてゐるが、特に樗牛の創見とすべきものがない。蓋し彼の研究心は旺んであつたが、學術的發見を爲すべきところ迄深入りしなかつた。いづれかと云ふと、樗牛は文士として殊に學者と

して今後に期待すべき人であつた。が、美學上の研究だけは流石に暗示に富み、『月夜の美感』など特に詩味多き佳篇を書いた。この方面に於ける彼は學界に記憶されてよい。

以上の如く點檢すると、樗牛の長所は主に、彼の抒情文にあると考へられる。彼はロマンチシズムの精神に終始し、青春の情熱に燃え、センチメンタルな思ひに滿ち、歌はんがために、泣かんがために、世に現れた觀がある。どうしても彼は本質上、詩人であつた。評論にも詩あり、史傳にも詩あり、學的考察にも詩を伴なふといつた風で、いつ如何なる場合でも、彼の中心生命となつたのは彼獨自の詩情であつた。かうした樗牛が抒情文に於いて、特に優れたのは當然のことである。

樗牛の抒情文には一種の妙味がある。評論文に見るやうな衒氣、客氣、强がり、驕慢の風などがない。樗牛その人の天眞、本質が玆には素直に出てゐる。優しく、

弱々しく、涙に滿ち、自ら彼の氣分、情趣の世へ讀者を引張つてゆく。その文章は寧ろクラシックの匂ひがするけれども、一味の清新さを持つてゐる。

彼の抒情文として代表的なものは、『わが袖の記』『清見潟日記』『清見寺の鐘聲』『思ひ出の記』などである。殊に日蓮の生涯を自傳體に擬して叙述し、樗牛滿腔の情感を竊かに託した『況後錄』は出色である。『わが袖の記』は『瀧口入道』の脈を惹いてそこに彼の多感多情の俤を示し、優艶清新な詩情を湛へてゐる。或は山水の間に放浪して戀を思ひ、或は人生を思ひ、運命を思ひ、「あゝ天地風雲多し、人間なんぞ涕涙のしげきや。」と嘆じた言葉に無限の感慨がある。私はそれ（わが袖の記）を『中央公論』の前身、『反省雜誌』の夏季附錄で讀み、深い感銘を受けて、卷を掩ふに忍びなかつたことを今も覺えてゐる。

樗牛の『わが袖の記』に對して、更に一進境を示したのが、『況後錄』である。『わが袖の記』は若々しい詩情に滿ちてゐることが多い丈、それ丈弱々しいとこ

ろが見える。その歌ふ聲は哀れにやさしい。それから『況後錄』へうつると、その歌ふ聲は男性的に強く悲壯の韻がある。それは樗牛が日蓮渇仰の至情に滿ち、靈的歡喜に浸りつゝ、日蓮の一生を力强く歌つたからである。樗牛はこの文章を自ら「豪傑體」といつたが、それは言ひ換へると、男性的文章だ。樗牛はそれを書きあげたとき（三十四年十二月）登張竹風教授に一書を贈り、

「況後錄と題する日蓮物語、これは到底中學物（『中學世界』）にあらず、聊か小生得意の文體に候間、右御掲げ被下度候。」

といつてゐる。かうして『況後錄』は三十五年一月の『帝國文學』に出た。私は當時それを讀んで、樗牛の進境を知つた。さうして彼が日蓮の一生を散文で歌ふについて、特に用ゐた「豪傑體」の文章こそ日蓮その人を躍如たらしめるに最も有效な樣式であることを沁々、思つたのである。いま、『況後錄』の一節を左に引用する。

伊東に死なず、瀧の口に斬られず、不思議に存へし命も、此處佐渡が島を今は最後の地と覺ゆるぞ。あらうれしや、人人、此程の喜びを笑へよかし、日蓮程の果報の者また世にあるべしや。古より君の爲めに死せしもの、親の爲めに死せしもの、妻子財寶の爲めに死せしものはあれども、法華經の爲めに命を捨てしものありや。是の教の爲めに臭き頭を刎ねられむは砂に黄金を代へ、糞に米を替ゆるに同じ、今こそ霜露の日影を待つばかりの命ながら、化城の迷ひ遙に去りて、靈山の開顯眼前にあり。頭は鋸にて引きも切られよ、胴は稜鋒もて貫かれもせよ、足には絆しを打ちて錐揑みにもせよ、この息の根の通はむ程は、南無妙法蓮華經の聲をばよも絶えじ。（下略）

七、樗牛の周圍の人々

樗牛の人と事業とは大體如上に盡きてゐると思ふ。が、樗牛の周圍にゐた赤門派の人々について一言して置きたい。言ふ迄もなく、赤門派は早稻田派と對立し、當時、文壇を二分してその一を領するの概があつた。赤門派の重鎮となつたのは言ふ迄もなく樗牛で、彼をめぐる文星のうちには、嘲風、臨風、桂月、晩翠、嶺雲、柳村、秋骨、禿木などがあつた。その他、羽衣、雨江、天隨、鯉洋、姑射、馮虛、劍峯、芥舟、醒雪、紫影、月杖、瓊音、健堂などもゐた。それらのうちに於いて、今日、文壇と少しく交渉を持つてゐるものは、僅かに臨風、健堂の二人ぐらゐである。

姉崎嘲風は樗牛の親友で、寧ろ最初から學者として起つた人である。文章は嘲風の得意とする所でなく、宗教學者として、間接に文壇に貢獻し、殊に宗教方面に於ける彼の業績には若干見るべきものがある。

それから一時、樗牛と並び稱せられたことがあつた大町桂月は詩人肌の點に於いて、樗牛と共通したところがあつたが、學力に於いては、樗牛に及ばず、文章

の點では漸く相拮抗した。桂月の本領はその雜文のうへにあつた。

桂月と對立した田岡嶺雲は、比較的不遇の間に短命な一生を終つた。嶺雲は霸氣横溢の才人で、その長所とするところは評論の上にあつた。彼の評論は感情本位のもので正鵠を失つた點もあるが、直言直筆、忌憚しない所に獨自の世界を持つてゐた。その俤を『嶺雲文集』に留めてゐる。

桂月、嶺雲と全く肌合を異にして、實質上、兎も角樗牛に對抗すべき力があつたのは上田柳村（敏）である。柳村は最初から、西歐文藝の精華をわが文壇、學界に移植するを以て念とし、文士よりも、より多く學者的な感じのする人であつた。彼が『帝國文學』に毎號執筆した『海外文壇』は文藝研究者の嗜讀したものであつた。また彼が、ギリシャ思潮及び文藝を高調し、細心精緻の學風を說きダンテの心境に言及し、幽趣微韻を談じて、文壇に一味清新の氣を注入した事は推奬してよい。彼の詩文の譯述も、『海潮音』『みをつくし』など、今讀んで感興が

淺くない。彼の晩年の著作には、『現代の藝術』がある。その他、土井晩翠は赤門派の詩人として一時盛名を馳せたが、いづれかといへば、抽象的な理窟つぽい感じ、生硬な感じがする。唯思想的に幾分、味ふべきものがあるにすぎないのではなからうか。

それから笹川臨風の史傳史論には、見るべきものがある。『元祿時世粧』『奈良朝史』『遊俠傳』など、彼一流の長所を示してゐる。唯その研究深きを穿たず、行文流麗であるが、氣力骨力に乏しい。それに次いで横山健堂、戸川秋骨の隨筆、雜文にいくらか見るべきものがあらう。

第三章　思想上の日本主義

一、西洋依存排撃

極端な歐化傾向に反對した國粹主義が明治二十年頃に唱へられた後を受けて、日清戰後に同志と共に日本主義を高調したのは、高山樗牛であつた。現在、昭和の思想界は、滿洲事變後、日本主義をもつて、ほぼ統一せられた觀があり、その內容も、學的に進步して、實際的、現實的にも、目ざましい飛躍をした。

從つて、これに先驅した樗牛の日本主義につき、今日、切に回顧さるゝのである。最初、樗牛は、高等學校時代に厭世觀を抱いて、懷疑的になつたことがあるが、それは、つきつめたところ迄ゆかず、そして一方では、西洋文藝の研究につ

とめると同時に、近世日本文學の再檢討にも手を染めるに至つた。

當時における樗牛の思想は、未だはつきり特色づけらるゝに至らなかつたのである。後、進んで、東京帝國大學文科に入つてからも、文藝、哲學を研究し、之について、いろ〳〵評論したが、思想上、その旗幟を明かにするところ迄ゆかなかつた。

ところが、いよ〳〵彼の思想上の態度をはつきりさせるやうになつたのは、日本主義を提唱してからのことである。それは明治三十年の時代で、樗牛が比較的に早く文壇、思想界に知られたのは、かく明確に思想上の態度を決定し、各方面に情熱をもつて、强く呼びかけた結果によるであらう。樗牛が玆に至つたのは、

(一) 歐化傾向の依然濃厚なのに慊らぬこと、

(二) 東京帝大の講壇で井上哲次郎博士から日本主義の講義を聞いたこと、

(三) 日清戰後の國民的自覺喚起の情勢に呼應したこと、

などによるが、もう一つは、彼の思ふところ、信ずるところを率直、大膽に告白する樗牛の性質に負ふ點があつたと思ふ。

惟ふに、過去に唱へられた國粹主義は歐化思想絶頂期の行過ぎを矯めるうへに役立つたにはちがひないが、その內容は漠然としてゐて摑みどころが殆どなかつた。この事は、樗牛も『國粹保存主義と日本主義』の條下に之を指摘し、

是の如き『國粹』は何物なるか、何故に內外千萬の事物の中、是の如き『國粹』の特に保存せらるべき價値ありとするか、社會經營の全局面に於いて所謂國粹保存てふことは幾何か國家國民の幸福を增進するに益すべきか。是等諸般の問題に就ては一も明示する所なかりしなり。

と言つた。之は私も現代思想史の考察に當つて、この點に失望した一人である。故に嚴にいへば、政敎社同人らは、國粹主義に明快な定義を與へ、學的に當爲の內容を說明することを要したのである。この事がなかつたのは、國粹主義の大き

い缺陥だつた。

そこで日清戰後において、國民的自覺の傾向が著しくなつたとき、樗牛らが、日本主義を唱へるについては學的に之をまとめることにつとめた。丁度、井上博士の日本主義論が帝大の講壇において行はれ、歐化的傾向を適切に是正するの必要を痛感したところから、茲に樗牛は、日本主義の內容と組織とにつき思考し、抽象的、形式的ではなく、具體的、積極的に日本主義の如何なるものであるかを說明することに力を入れた。茲に國粹主義に代つて、新形態、新解釋を具して現れた彼の日本主義を見るのである。

この當時、國民的自覺が一部に起つてゐたにはちがひないが、學者、思想家の多くは、西洋依存的で、クリスト敎の如きはこの勢ひに乘じて、ひろがり、歐化思想は、一向去勢されなかつたのみか、ますゝ蔓延する傾きがあつた。

故に一方において、これを是正しなければならぬ必要の十分に存したことは、

申すまでもない。唯この仕事を擔當するものは、樗牛の如き情熱、信念、敏活性、宣傳性がなくてはならなかつた。この點、樗牛は、歐化思想や西洋依存主義を打破るべく、最もふさはしい戰士の一人だつたのである。

二、日本主義へ

樗牛が『日本主義』において說いたところを今日見ると、慊らぬ點が二三に留らない。然し、當時にあつて、彼の言つたところは、國粹保存主義の人々の言說にくらべて、二段も、三段も進んでゐた。彼のいふところを要約すると、旣述の如く、

(一) 國祖崇拜、

(二) 生々光明を尙ぶ、

(三) 淸淨潔白を重んず、

（四）社會的生活を重視し國民的團結を尊重す、
（五）尚武主義、
（六）世界平和及び人類的情誼の發達を計る、
（七）佛敎、基敎を排して、神道を重んじ、現世活動主義を推奬すといふのであつた。

之につき、樗牛は、『日本主義』でかう解說したのである。

（一）國祖崇拜

君臣一家は、我國體の精華なり。之れ實に我皇祖皇宗の宏遠なる丕圖に基くものにして、萬世臣子の永く景仰すべきところなり。故に國祖及び皇宗は、日本國民の宗家として無上の崇敬を瀝すべき所、日本主義は、是の故に國祖を崇拜して常に建國の抱負を奉體せむことを務む。

（二）生々光明主義その他

我國民は公明、快濶の人民なり。有爲進取の人民なり。退嬰保守と憂鬱悲哀とは其の性に非ざるなり。是に於いてか、日本主義は光明を旨とし、生々を尙ぶ。是に於いてか、夫の退讓を重んじ、禁欲を訓へ、厭世無爲を鼓吹するもろ〳〵の敎義を排す。（註、佛敎、基敎を指す）億兆一姓に出で、上下其の心を一にし、內に臨みては棣萼相親しみ、外に對しては每に國威を擴張して、古來未だ曾て外侮を受けず。是れ我國民の萬邦に冠絕せる所なり。是れを以て、日本主義は、平時にありて武備を懈らず、愈々國民的團結を鞏固にせむことを務む。

（三）世界平和と人類的情誼の尊重

然れども、妄りに己れを樹て、他を容れざるものにあらず。國內を修めて海外に臨み、與國と共に永遠の平和を享受せむことを希ふ。是に於いてか、日本主義は世界平和の維持に務め、進みて人類的情誼の發達を期す。

（四）結論

要は我邦建國の精神を發揮し、我國民の大抱負を實現せむとするにあり。そもそも信仰は之を內に啓發すべくして、之を外より襲用すべからず。日本主義は今日吾等の創造したるものにあらずして、國民が三千年の歷史的檢證に本づける確實なる自覺心の最も明瞭なる發表に外ならざるなり。其の由來するところ深く國民の特性に根據し、遠く建國の精神に淵源し、牢として拔くべからず。

（中略）日本主義は大和民族の抱負及び理想を表白せるものなり。日本主義は日本國民の安心立命地を指定せるものなり。日本主義は宗教にあらず、哲學にあらず、國民的實行道德の原理なり。

以上、樗牛のいふところは、明快で、きび〳〵してゐて、齒切れが宜い。然し、建國の精神とは何か。國民的實行道德の德目として重要なものは何か。さういふことをはつきり言明してをらぬ。この點、樗牛が早呑み込みをした傾向がある。

それに樗牛は、『古事記』神代卷は讀んだやうだが、肝腎の『日本書紀』につ

いて、深く考ふるところがなかつた。卽ち彼が日本主義を唱へるについての基本知識が十分でない。それは、當時としてやむを得ないことであるが、せめて水戸政敎學の大要を知り、國學における本居、平田らの考へを知つてゐたならば、樗牛の日本主義は、もつと根强い生命を持續し、より多く、思想界を動かしたらうと思ふ。

ところが、樗牛は、この點で、餘りにも性急であつた。そのいふところは、國粹主義の無內容に優つてゐるが、基本知識の缺乏が彼の言說をして上すべりせしめたのは、何より遺憾である。

既に度々、建國精神を高調する以上、彼は之が證典を『日本書紀』のうへに求めるの必要があつた。勿論、『古事記』からも、證典を見出すことにつとめねばならぬのは、當然だつたが、樗牛は、そこまで深く探究するの方法に出なかつた。

これがため、樗牛の言ふところは、明確な根據を缺いた氣味がある。せめて水

戸の『弘道館記』でも讀んで置けば、皇道及び日本精神の內容が既に樗牛の說くところ以上に、はつきり說論せられてゐるのを知つたにちがひない。

三、排宗教

若し樗牛が『弘道館記』を讀んで、進んで『日本書紀』に眼を注ぐならば、日本の建國精神についての具體的說明を適確に爲し得たらう。蓋し『弘道館記』は、支那學の王道に對して、皇道を說いた文書で、日本的性格を道德、倫理のうへに反映して、

(一) 忠孝一本、
(二) 文武不岐、
(三) 學問、事業の一致、
(四) 神儒調和などを早く唱へた。

つぎに『日本書紀』に眼を注ぐと、そこに神武天皇の御詔勅のうへに、建國の三綱、

(一) 愛——積慶
(二) 叡智——重暉
(三) 正義——養正の三綱が說かれ、日本の道義建國の大旨が最も嚴肅に最も莊重に示されてゐるのである。

且つ八紘爲宇の天業についても親しく國民に垂訓せられ、建國三綱のもとに世界を敎化して、萬邦を協和せしめ、各々その處を得せしめて、明朗、圓滿な一つの宇の如く、世界を純化しようとなされる御思召がはつきり仰がれる。

さういふ點について、樗牛が知つたならば、彼の日本主義宣言は、その內容を深化し、醇化し得たと思ふ。ところが、樗牛は、まだそこまで到達しなかつた。のみならず、日本主義において、排佛、排耶の方面をより多く言說し、

「吾等は日本主義によりて、現今一切の宗教を排擊するものなり。卽ち宗教を以て、我國民の性情に反對し、我が建國の精神に背戾し、我國家の發達を阻害するものとなすなり」

といつて、各方面の宗教家の反感を挑撥した。

以上の言は、樗牛として餘りにいひすぎてをり、粗放な嫌ひなしとしない。何となれば、日本神道も亦宗教として存在する以上、「現今一切の宗教を排す」といふ樗牛の宣言は、矛盾に陷るからである。彼もいくらかこの點を氣にしたと見え、

「我邦固有の神道は全然現世教たり。夫の主ばら未來死後を說き、もしくは超絕の世界を悦惚する印度歐羅巴的宗教の比にあらざるなり」

といつた。然し、それなら「吾人は日本神道以外の諸宗教を排す」といひかへねばならない。

殊に日本神道は、神ながらの道を說いて日本國體と深い關係を有し、國體の淵

源を知るには、純正日本神道の知識を要すのであるから、樗牛は、當然、日本神道が日本主義の重要素となる所以を正しく認識しなければならない筈である。

ところが、この點にいひ及ばず、現世主義の力說にペエジを費しつゝ、日本神道の重要意義を輕視するかの如き態度に出たところに、樗牛の大きい手落ちがある。

だから、當然、樗牛に身方する筈の神道諸家は、當時、樗牛が佛耶兩教の戰士を向かふに廻はして、はげしく苦戰しつゝあるのを傍觀した氣味があつた。そして樗牛は、佛教が平安末期から鎌倉時代にかけて日本化せられたことを丸で知らぬかのやうに取扱ひ、水戸學派の排佛說の遙かに具體的、現實的なのにくらべて、論敵に乘ぜられやすき論法をもつて、佛耶兩教の士と渡り合つたのは、いかにも、用意のうへに至らぬところがあつたのを思はせる。

四、日本主義宣揚

かくいふと、樗牛の日本主義には、缺陷が多いと思惟せられるかも知れない。然し彼の日本主義宣言は、當時の學者が左顧右眄して、何ら思想的態度の見るべきものなきにくらべると、遙かに男らしく、また堂々としてゐる。

殊に國粹主義運動後、歐化思想が烈しく渦卷いて、すべての思想、すべての學問が西洋依存的となつた時に當り、之に向つて、思想上の警鐘を亂打するの必要が大いにあつた際、樗牛がその情熱の燃ゆる儘に、日本主義の信念を吐露したことを多としなければならない。

且つ樗牛は、排佛、排耶の主張を高調するために、各方面と論戰し、また日本主義內容の十分整頓せられなかつたがために却て同志と思はるゝ人々らの反對、駁擊にもあひ、彼もその意外の結果に聊か氣落ちした氣味はあつたが、兎も角、

さういふ機會を捉へて、善戰、健鬪した。

かかる意味で日本主義を弘布するうへに樗牛の言論が相當役立つたことは之を公平に認めて宜い。それに、樗牛の日本主義宣傳は、熱烈を極め、機會ある毎に各種の新題目を提げて、各方面から之を說くことを怠らなかつた。

例へば、『明治思想の變遷』と題する學術的論文のうちにおいても、彼は、西洋依存主義を非難し、排擊することを忘れず、合せて憲法發布及び敎育勅語渙發の重要意義を宣揚することにつとめた。

○排西洋依存主義

從來にあつては、國民の思想を動かしたる主力は、常に西洋思想なりき。かの民選議院の爭論の際にあつて、是れを主唱せるものは素より論を待たず。是れに反對せる主力も亦西洋學者なりき。國學、神道の系統を引ける純粹なる日本主義論者も是の中にありしかど、そは極めて少數にして、特に言ふに足らず。

爭論は主として西洋學者の爭論なりき。故に加藤氏（註、加藤弘之）一派の獨逸學者が民選議院を尙早とし、若しくは否認するにも、其の論據は一に西洋の學理にあり。一も本邦固有の國體、民情を根據として立論したるものにあらざりき。

樗牛が右の如くいつた傾向は、明治四十五年間を一貫した主流だといつても宜い位で、西洋依存の風潮は隨所に漲つてゐた。かの世界主義一派が日清戰後に唱へ來つたところも、西洋依存的で、世界主義に身方した當年の文相西園寺公望公は「日本の文明は西洋流でなくてはいけない」と公言したのである。

かかる世界主義が當時、思想界の一角に相當侮り難い勢力をもつた所以は、西洋依存的風潮の存在と合致したからだつた。樗牛は、さうした傾向を非とし、先づ世界主義が內包する思想について、『過去一年の思想界』のうちでかう解釋した。

○誤れる世界主義者の主張

若し夫れ世界主義に至つては、全く別種の原理に本づくを見る。是の種の思想によれば、世界上の人類は其の等しく人たる所以に於いて、歲時方處の差別を容るべからず。人類生存の目的素と×××なる人道の圓滿なる實現に有する以上、國性、國體の差別見に執著し、國家を以て倫理の標準と爲さむは××なるに過ぐ。人類の道德的意識の欲求する所のものは、さる偏狹なるものに非ず。遙に高上に、遙に偉大なる理想にあるなり。畢竟、××は個人の爲めに存するもの、個人が××に盡すべき義務あらば、そは個人自らの幸福に利益あるが爲めのみ。人の人たる所以の目的は、單に其人の伍する國家の××を圓滿に現ずることによつて果さるべきものに非ず。唯々吾人人類は世界永久の眞理と認めたる所に從ひて、天地と共に悠遠の生命を保つにあるのみ。云々。

○樗牛の世界主義に對する非難痛擊

世界主義は日本主義がやがて國家主義なるに反して個人主義なり。獨り社會道德に於いて然るのみならず、政治上に於いては個人を以て君主と並立する重要原素なるを認めむと欲す。（中略）世界主義の側にある人は、我が國民が忠孝に關して有する道德的意識を以て、人道の理想に戻れる虛僞の觀念となし、それを勸奬する國家主義の道德を以て偏狹固陋なりとす。彼等は歷史を見ること、國家主義者流の如く爾かく重からず。されば歷史によりて結成せられたる文物は、必ずしも國民性情の中に拔くべからざる根抵あるを信ぜず。隨つて是の如き文物にして彼等の理想とする所に違ふものは、外來一時の勢力によりて容易に矯正し、又は打破することを得べく、且つ是の如き矯正もしくは打破は、必ずしも國民性情の滿足を傷つくるものに非ざるを信ず。是の點に於いても、世界主義は全く日本主義と正反對の主張を有するものと謂ふべし。

以上の如く、樗牛は、個人主義、自由主義の傾向を有した世界主義を手きびしく論難し、日本主義精神を高調した。のみならず、日本主義の徹底を期するがために、帝國憲法、教育勅語について樗牛の正當な考へを披瀝し、かくして日本主義の向ふべきところを示したのである。

○樗牛の帝國憲法及び教育勅語に對する感想

帝國憲法が我が國體、國性の特質を明かにし、國民をして我が欽定憲法が、英米佛諸國の憲法と日を同うして論ずるべからざるものなることを知らしめしは、啻に國民の政治思想を統一するの力ありたるのみならず、併せて國民的道德の根據を確立するの大勢力ありたること、蓋し疑を容れざるなり。

帝國憲法が政治上に於いて爲したる事業は、教育界に於いて教育勅語是れを爲せり。蓋し政治思想は憲法によりて統一せられたりと雖も、教育界に於ける歐化主義と國粹主義との紛爭は尙未だ一定するに至らず。佛教、儒教また各々一方に割據し、人々其の信ずるところによりて行動し、左支右吾、一般國民は

殆ど其の適歸する所に迷へるの觀あり。此時に當りて教育勅語の渙發せらるゝあり。教育界の輿論是れに於いて一定し、忠君愛國、擧國一致を以て國民道德の大旨趣として奉體するに至れり。

是の如く見來れば、我が皇室が國民の中心、國家の支柱たるの事實は、愈々明晰なりと謂ふべし。先に維新草創の際、かの五事の御誓文を以て天地億兆に誓はせられ、茲に明治新文明の大方針を示されき。次いで西洋心醉者派が民選議院の設立を建白するや、國體の特性、民情の理想に鑑みさせられ、一國の輿論を容るゝと共に、實施の期に先だちて假すに研究準備の年月を以てし、更に期に先だちて欽定憲法によりて我國體の性質を明かにし、以て國民の覺悟を定めさせられき。今や又、維新以來麻の如く亂れたる德敎のために、是の千古不磨の大詔を下し賜はり、以て國民道德の大歸趣を知らしめ給ふ。實に至仁至慈なる叡慮の程は我國民の幾重にも感銘且つ奉體すべき所なり。

かく樗牛は、日本主義の根抵を爲すところの聖典の重大意義を明かにし、歐化者流の反省を求めたのである。唯これにつき、樗牛が精細な意見を述べなかつたことは今日からいふと、物足りない。然し、當時にあつて、帝國憲法の眞精神を說いて、皇道政治の本義に觸れようとつとめ、また教育勅語の大精神を說いて、日本獨自の德敎の大本を闡明することに心し、日本主義の心髓を一般に知らしめようとしたことは、確かに要を得てゐたといはねばならぬ。

五、日本的教育觀

殊に樗牛が日本主義に立脚して、教育改革を叫んだ聲は、今尙現代に資すべき點があると思ふ。在來、この方面の樗牛についてはこれを世に紹介した人がないやうだが、樗牛が眞實に中學教育の改革について考へ、且つ要求したところは、切實だつた。

先づ彼は、文豪ラスキンがイギリス人の教育觀の誤れる方向を執つたことを指摘してゐる言葉を引き、

ラスキンが「英國人は一般に教育に對して大なる誤解を抱いてゐる。即ち教育を以て生活の一方便として心得てゐる事がそれである。教育は利益の多い商賣どころではない。實に多くの費へを要するのである。最も立派な教育は利益の最も少い、到底金錢上の勘定に合はぬものだ。何れの國民が其の偉大なる美術、其の偉大なる智慧でパンをまうけたものがあらうか。パンは小さな技倆や製造や又は實用上の知識で得られるが、高尚なる學術、高尚なる哲學、又は高尚なる藝術は、金を出して買ふべき寶で、決してパンの爲に賣るべき貨物ではない。國民教育の爲めに大いに費すべきであるが、是れに依つて得る所のものは金でなくて人物であることを覺悟せねばならぬ。この人物は即ち諸君の金に價するもの、國の寶である」

といつたことに衷心の共鳴を表示した。

樗牛は、かうした英國式の實利主義の教育には絶對に反對し、ラスキンの見識を賞揚したが、進んで彼は、當時日本の倫理教育の不振を遺憾として、

「今日、倫理教育が振はざるは、掩ふべからざる事實なり。啻に實際に於いて振はざるのみならず、是れを統率する所以の主義に於いても、世の歸向する所、一ならず。大體より觀察すれば、今の中等以下の國民的倫理教育は、殆ど無規律、無主義の渾沌裡にあり」

と喝破し、倫理教育を生かすの道に言及して、

「今日倫理教育の最大事業は、國家道德の大主義を以て、社會の全體を統一し、小は個人より大は國家に至るまで、同一均齊の道德的感能を以て外來の勢力を調攝するにあり」

と言つた。即ち日本精神をもつて全體の教育を統一すべき急務の存することを

主張したのである。

次に當時の中學教育についての要望を率直に披瀝するに當り、國民教育と專門教育とを混同せるの弊あるを痛切に衝き、中學教育が專門教育に對する準備にあらずして、國民教育そのものであらねばならない所以を切論した。

○樗牛の日本主義的教育說

夫れ尋常中學はもと國民教育の範圍に屬すべきものなり。卽ち國家の中堅となるべき中等社會の國民が其の國民たる資格に於いて有せざるべからざる最小限の教育を受くべきところなり。されば、尋常中學の教科課程は主として嚴密なる意味に於ける國民教育の教科課程ならざるべからず。（中略）素より國民の中に普通教育に滿足せず、更に進みて高等專門の知識を得むとするものあるべし。然れども國家は是の專門教育の志望者の爲に特別の設備を爲すに先立ちて、普通國民教育を授けざるべからず。……是の如くにして、一方に於いては

國民教育の精神を貫徹すると同時に、他方に於いては、專門教育の前途に適應するを得む。畢竟一般教育としては、是の兩面を有すると共に、嚴密に謂ふ所の國民教育と是の國民教育以上の專門教育との間に截然たる主從の差別を立てざるべからず。

（前略）飜つて今日の中等教育を觀るに是の主從の關係の全く顚倒せるものあるを見る。英語科數學科歷史科の如きは其例なり。英語科は其の授業の時間の上より見るも其の授業上の實際に就て見るも、最も主要なる學科として考へられ居ることは明かなる事實なりとす。

然れども國民教育として爾かく重きを英語科に置かざるべからざるの理由果して何處にありや。尋常中學卒業生の有する英語の知識は、實際上、甚だ卑近なるものにして、大體の上より見る時は、普通の讀書會話だにも辯ずる能はざるの有樣なり。されば、尋常中學卒業後、長く學校教育を離れて實際の業務に

從事せざるべからざる運命を有する大多數の國民が業を卒へて後、期年たらずして殆ど全く英語の知識を遺却し了するは最も自然の勢ひなりとす。

もし彼等にして卒業後も亦英語の實用を必要とするが如き境遇に際會したらむには、實際の需に驅られて、學校教育にはよし不完全なりし學力も、實地の練習によりて益々上達し、益々其の利便を享受するを得む。然れども是の如き境遇の下に生活すべきものは、今日に於いては勿論、內地雜居（註、明治三十二年七月實施）以後にありても、極めて少數と見ざるべからず。されば國民全體の上より見れば、中等教育に於いて最も多くの時間と最も多くの勞力とを消費して、辛うじて、而も完全に學び得ざる英語は、殆ど全く不用なる教科なりと謂はざるべからず。かかる不用なる學科を最も主たる學科とせる今日の中等教育は、果して國民教育の精神を體認し奉行せるものと謂ふことを得るか。吾等甚だ是れを疑ふ。

かく樗牛は、英語を中學生に課することの利少くして、弊多きことを率直に指摘してゐる。今日、この問題は、尙正しく解決されてをらぬが、樗牛の見解は、曖昧を許さず、はつきり彼の信念を吐露してゐるのである。

六、數學改革

更に樗牛は、數學、歷史の教科についても、彼の所信を正直に告白した。卽ち數學の教科に關しては、

「算術、幾何の普通なる理論は素より中等社會の一國民として必須なるものなるべし。然れども立體幾何高等代數、もしくは解析幾何學の難解特殊の知識は、將來專門學を修めむとするものを外にして、一般國民に果して何らの實益かある。中學卒業生にとりては是等は全く前に述べたる英語と其の運命を同うすべきものにあらずや」

と直言したのも當を得てゐる。

殊に樗牛が力を入れて說いたのは、日本主義から見た歷史敎育の確立である。

彼は、

「吾等が次に國家敎育の振肅のために普く敎育家の注意を煩はさむとするは、尋常中學に於ける歷史科なり。吾等は先づ問はむと欲す。今の尋常中學の歷史、殊に西洋史の敎員は抑々如何の覺悟を以て授業しつゝある乎」

と詰問し、中學における歷史の敎へ方が無生命にちかいのを歎き、實際に役立つべき點に力を注ぐべき旨を主張した。

「試みに今の中等敎育の歷史敎科書なるものを取りて之を檢閲せよ。殆ど一個の純粹なる科學として說述したるのみ。（中略）是の如き敎科書に依傍して授業するところの敎員輩が、毫も國民敎育としての歷史の實際的方面の須要なるに看到せず。漠然茫然、只動植、理化等諸他の科學を敎ゆるも同一の覺悟を以

て、偏へに史的知識の注入を以て能事了れりと思惟するは、自然の勢ひなりと謂ふべし。

（前略）是れを以て希臘、羅馬時代と十九世紀と、彼れ等に於いて輕重の差なく、バビロニア、アッシリアの興亡と日淸戰爭と彼等に於いて同一の價値を有す。實に彼等にとりては、現下の極東問題の由來は、歷山大王の乘馬が黑色なりしか、又は白色なかりしかの問題に比して特に注意すべき理由あらざるなり。

（前略）中等社會の國民をして其の國民たるの義務を完全に盡さしめむと欲せば、其の屬する國家の現狀如何に就て出來得べき丈け明白なる知識を有せしめざるべからず。殊に今日の世界は如何なる歷史を理由にして之に到りたるか、是の列國對峙の間に存する所の我國家、我國民の位置は、過去及び現在に於いて果して如何、將た又將來に於いて如何にすべきか、――這般の知識は、國民の國家的觀念を修養する上に於いて最も須要とする所なり。而して是の如き知

識を與ふるものは歴史に外ならず。（中略）是れを以て國民教育としての歴史は主として現在の自國を中心として觀察したるものならざるべからず。夫の現在の世界に關係少き遙遠なる過去世の事、又は我國家と何等の接觸交渉の存在せざる諸他の事實の如きは、成るべく是れを陶汰し、現在の世界、殊に自國に關係する事實に對して特に精確なる知識を與へむことを期すべき也」

かく樗牛は、生きた歴史、知らねばならない歴史について、主點を置かねばならぬことを說いた。彼は國史教授のことについては、何も觸れてをらぬが、この點においても、彼の見解は、必ずすぐれてゐたにちがひない。

要するに、樗牛の中學教育改革の一端は、以上の如く、彼の實際的經驗に照らして思考し、その要望のうへで頗る適切なところがある。勿論、樗牛のいふところは、尙未だ十分ならず、僅かにその心づいた當面のことに觸れたにすぎないが、日本主義精神を中學教育のうへに徹底することは、今日においても必要で樗牛の

昔叫んだところは、決して單なる空言に終らなかつた。

七、行學一致の主張

それにしても、樗牛の勸告が果して容れられたか、どうか。これは疑問である。當時、西洋依存的新奇主義に只管醉ふたものは、樗牛のいふところを正しく受け容れなかつたにちがひないが、樗牛の言葉は、正大そのものであつた。そして彼の先唱したところは、今日一般に肯定され重視せられて、明白に樗牛の思想家としての先覺者的態度を欽仰せらるべき日が來たといつて宜からう。

唯樗牛が當時、その日本主義の內容を向上し、深化すべく、全精力、全熱血を注ぐべくして、而もそこまでゆかず、ついでニイチエの哲學に暗示を得て、倫理、道德に關する彼の苦悶的告白を爲し、天才主義本能主義、權力意志主義、超人主義を說くに至つたことは、我らの意外としたところにほかならない。

然し、彼の日本主義的傾向は、之によつて一切、解消したのではなく、ニイチェの哲學を說くに當つても、更に一轉、日蓮主義に歸趨したときにも、彼の日本的性格は、いつも作用を止めなかつた。故にニイチェ主義時代の樗牛も、日蓮主義當時の彼も、その心髓においては、一種の日本主義的傾向を忘れず、つまり、異つた形のもとに、日本精神文化の向上を意圖したのだといつても宜いと思ふ。

唯日本主義以後、彼の言葉が矯激に流れたり、時に脫線したりしたのは、彼の若さでは、やむを得なかつたことと思ふ。殊に情熱の人、樗牛においては、これを寬大に見ることを許されて宜からうとも思ふ。

最後に今一つ擧げて置きたいのは、樗牛の『學問死活辯』である。現在、教育上、學問を以て知性本位とするの弊を排し、知よりも行に重きを置き、かくして知行合一の旨を傳達するに至る必要を說く人々が漸く多い。

この事につき、樗牛は早くからさういふ方面に著眼して、日本主義的立場から

「知行合一は畢竟學者究極の標的たり」

といつた。そして樗牛の見るところに言及して、

「學びて而して用ふる所以を知らず。知りて而して行ふ所以を覺らず。學者の品位、學問の獨立は是の如くにして初めて保ち得べきものなるか」

と叫び、

「今の學者は徒らに其の枝葉に走りて其の根幹に歸ることを遺却し、人生に近かうむるを以て高しとなし、遂に世人をして學問是れ閑事業なりとの妄見を抱かしむ。嗚呼是れ誰の衍(あやまり)ぞや」

と慨歎した。

そこに別に斬新の見はないが、空理、空論して實人生に遠ざかり、知性のための知性に走つて、知と行との一致を忘れたかの如きものが多いとき、樗牛が「行」と「知」との双關不離を認めて、生きた學問を奬勵しようとつとめたのは、彼の

見解の正しさによるのである。

第四章　文藝上の日本主義

一、日本文學の新研究

樗牛の日本的性格は、ひとり、思想上で日本主義を提唱せしめたに留まらない。文藝上においても亦熱烈な日本主義運動を爲すに至つたのである。

惟ふに、樗牛は、一種の天才的人物で、同時に創造性、獨自性を自ら重んじた一人である。彼の周圍には、いろ〳〵の學者文士がゐたが、いづれも、創造性、獨自性において、到底、樗牛に及ばない。成程、樗牛の學問は、未完成そのものにすぎない。然し彼は、その情熱の底に創造性を蓄へ、獨自性において、一頭地をぬく素質をもつてゐた。

かかる樗牛が、文藝上、歐米追隨を潔しとしないで、そこに日本主義的活動を起し、進んで國民文學の樹立を目ざしたことは、當時において、確かに卓見の一つであり、また先驅者的役割をある程度に於いて爲したといつて宜からう。

樗牛の文學的閲歴を見ると、彼は決して歐米文學に對して、冷淡ではなかつた。彼は好んで、バイロンを說き、ハイネを語つた。その他ウオヅウオース、ゲエテ、ズウデルマン、ハウプトマン、ホイツトマン、カアライル、ジョルンソン、ゾラなどにも言及してゐる。

然し、彼の興味の中心は、日本文藝の探求にあり、その組織化、體系化に努力する點にあつた。そして歐米文學は、參考としてこれを見たり、讀んだりしたにすぎぬのである。また一方、支那文學、印度文學にも注意を拂ひ、時にこれを評論したけれども、歸するところ、それらを日本文藝の養分を增す上に活かしてゆくといふ見定めをつけてゐた。

かういふ點は、在來、樗牛研究家も存外不問に附してゐるやうに思ふ。既に日本主義思想を鼓吹した樗牛の文學的活動が當然、日本主義的であるべきは、すぐ了解されやすいところであるに拘らず、この方面に力を注いだ樗牛の業績が、今日、はつきりするやうに說明されてをらない。

私の見たところによると、樗牛は、早くから日本文藝の研究に熱意を有し、西歐文藝と比較して、どういふ長所を持つかに注意したと思ふ。同時にそこから彼の日本文學闡明を各方面から新しく試みるべき必要說も生れ來つたと考へる。

私が樗牛の名を知つたのは、『帝國文學』に近松巢林子の戲曲研究を發表した頃であつた。それは明治二十八年のことで、『近松巢林子』、『巢林子の女性』などを興味深く讀んだのを今も覺えてゐる。

當時は、江戸文學に對する新しい研究を試みる傾向を生じてゐた。この時に當り、樗牛は、西洋文學の知識を活用して、巢林子の戲曲に新解釋を加へたのであ

る。それにおいて、樗牛は、文學研究法について語り、巣林子を研究するに當つて、特に審美的觀點に起つことを明かにした。それは、確かに當時において、一見識である。

かうした方針で樗牛が書いた中で、一番私が共鳴したのは、『巣林子の女性』だつた。樗牛の『巣林子の人生觀』は、見解のうへで不徹底であり、解釋また少しく偏つてゐるが、『巣林子の女性』になると、愛の詩人としての巣林子の面目を戯曲解剖をとほして、よく闡明してゐる。要するに、近松の戯曲を新しい眼、新しい心をもつて見て、妥當性を失はなかつたところに、樗牛の日本文學研究における優れた點が見える。

だん〳〵樗牛の研究報告などを見てゆくと彼は古代文學についても相當の關心を持つてゐた。このことについて、樗牛は左の如くいつてゐる。

「今日の批評家は我邦の文學に現在あるを知りて過去を忘れたるに似たり。當

代末派の作者に對してだに毫も批評の勞を吝まざる彼等は、本邦古代の作者に對して甚だ冷淡なるが如し」

「古典は春陽堂（註、當時は春陽堂が文學書肆として一番知られた）の小說よりもむづかしき也。古典は歴史を有するが故に其研究も亦深刻周到なるに非ざるよりは、前人の所說に一頭地を畫すること難し。而も歴史は常に新らしき眼孔によつて解釋せられざるべからず、何れの時代にあつても過去は現在により で適譯せられざるべからず。本邦文學史は十分の報酬を供へて新批評家の檢閲に待ちつゝあるを知らずや。

且つそれ本邦古文學の知識の一般讀書社會に缺乏せるは著しき事實也。『クラリッサ、ハーロー』、『トム、ジョンス』、『ヴニテー、フエア』を口にするものにして、源語、落窪、狹衣等の筋だに解せざるものありとせば、誰か古文學研究の推奬を以て今日の急務に非ずとせむや」

樗牛のいふところは、よく核心を衝いてゐた。そして彼は古代文學に審美的批評を加ふべき必要を力說し、

「我邦人の古文學を評論せるもの少からず。然れども多くは歷史的方法を主とし、著作其物に就て純然たる審美的方法を爲せるもの少し。是れ我が批評文學の一缺點なり。原語乃至近松西鶴を論ずるもの皆是れなり」

といつたのは、正に當時の弱點を穿つてゐる。

二、日本獨自の文藝創造

私が樗牛において、特に共鳴したのは、その能樂鑑賞について、早く妥當性を示してゐる點である。今日、能樂を正しく理解する文士、學者は少くない。然し明治二十九年頃にもうその本質を正解してゐた樗牛は、畢竟、彼に十分の日本的性格があつたからだと思ふ。彼は能樂會の保存を主張すると共に、能樂の美點が

何處にあるかを一般人に知らしめようとした。そこで彼は、『能樂の性質』といふ小論文を書き、その長所を指摘したのである。

「能樂の形式たる、素と神秘的事物を包容し、表彰するに適す。我邦の謠曲が多く佛教的精神を通じて、幽明兩界の關聯を表せしもの多きは、尤も能樂の體を得たるものなり。想ふに我邦の能樂は猶ほ歐州の樂劇の如きか。觀聽するもの感激し、神集り、靈體やうやく一致し、形神やうやく交はり、恍然、嗒然、身は限りなき空想の世界に導かすに至つて、現實の規則は氷の如く解け去り、心は理想の洗禮を受けて、一種空靈の世界に住す。是の如きは、普通の劇が企て及び難きものにして獨り能樂と樂劇の吾等に彼れらは感化なりとす」

現在の能樂に對する見解も亦樗牛の解釋以外に出ないのを想ふて、樗牛の鑑賞力の凡庸でないことを知らしめる。

更に樗牛の日本美術に對する理解を點檢すると、玆にも彼の敎養の淺からぬこ

とが窺はれ、その鑑賞力の水平線を拔いてゐたことをほぼ想察せしめるのである。

樗牛は、『日本美術史』において、日本繪畫の特色に觸れ、

「今本邦の繪畫は形似具はらず、遠近明暗等の寫生活に於いて缺くる所あるにも拘はらず、尙能く當眼の物象を表現し、觀る者をして其の特相活動の有樣を想像し得せしむるものあるは、優に一種の印象派として成功するものと謂はざるべからず。蓋し本邦繪畫の尙ぶ所は眼前の形似よりは、形外の餘情にあり。餘情とは畢竟默敎暗示 (Suggestiuenoss) の謂に外ならず。卽ち一端を擧げて全隅を示し、一線を畫して全面を現はすの謂也」

と解釋した。ここに樗牛の日本畫に對する見方の妥當性がある。

更に樗牛は、日本美術がその理想として目ざす方面にも言及し、

「快濶光明と相對して本邦美術の美的理想と見るべきは、蓋し沖澹幽寂と云ふ

が如き趣味なるべし。是れ宋元淸より狩野派の諸家に貫通せる水墨畫に最も能く現はるゝ所の趣味にして、本邦鑑賞家の熱心に歎美する所也。(中略)國民の美的意識は、謂はゞ是の兩端を往來せるものと謂ふべきか。所謂輕妙と言ひ、瀟洒と云ふは、たとへば、兩端の中間に位する趣味なるべし」

と述べてゐる。唯日本繪に缺けたところは、崇高悲壯の美であるとし、

「天平時代の或る佛像もしくは明兆・如拙・雪舟等狩野派の二三の或製作を外にすれば、眞に崇高(サブライム)と稱すべき表情は本邦美術史に於いて最も求め難き所のもの也。(中略) 本邦の繪畫は其の最も嚴肅なる意義を有するものにありても、人生に對する大執著、大煩惱、若しくは大戰鬪を表現せむとしたるものなし。まして是等の大活動を基礎とせる安心、大覺の理想の如きは殆ど美術家の想著せざりし所にかゝる」

と言つた。玆にも、樗牛の考察が穩健、切實である所以を見るのである。

かく樗牛の日本文藝に於ける趣味と理解とは相當の程度に達してゐた。加ふるに、彼は、思想上、日本主義者として、茲に日本文學の闡明と今後における日本獨自の文藝創造といふことに、一種の熱意を持つであらうことは、彼の言説に徵しておのづから看取せらるゝところである。

三、古典の新生

私自身の記憶によると、文學上、自然主義が勃興して以來、日本文學の研究は久しく閑却せられてゐた。それは、歐米文學の研究が主體を爲し、日本文學を顧みるものが極少かつたからである。私は之を遺憾として、古典文學の新しい見方から始めることの必要を痛感し、明治の末年、抒情文『平家の人々』を書いたが、續いて、『源氏の人々』、『近松の人々』、『西鶴の人々』、『光源氏の一生』、などを書いた。

ついで『日本文學講座』（新潮社刊）の計畫に與り、之が再認識、再檢討の風潮を再興することにつとめた。こんな工合であつたから、樗牛の時代において、日本文學の新解釋を心がけたものゝ少かつたことは申すまでもない。

さういふ間において、樗牛は、眞面目に新しい意味で日本文學闡明につき、種種要望するところを述べたのである。今日、日本文學の研究が非常に旺んな勢を示したのを見ると樗牛のこの方面における熱誠を回顧するの情に堪へない。

樗牛が日本文學開拓に資しようとした要望は、『民俗傳說の蒐集』、『和漢學者の一事業』、『國學及び漢學の將來』などのうへに現はれてゐる。かうした事柄も今日、著々、現實にせらるゝに至つたが、樗牛の時代には、殆ど顧みられなかつた。しかし、彼はいつも、その思ふところを率直に告白し、日本文學の原野に新しい鍬を入れようと心がけたのである。

勿論、樗牛のいふところは、今日において、最早何の新味もないとせられるで

あらう。然し、當時にあつては、一つの進んだ考へ方であつたにちがひない。卽ち民族傳說の蒐集を勸めて、

「大にしては一般國民の特性是れによりて知らるべく、小にしては一國內に於ける各地方の民情亦是の中に現はる。文學者が研究の對象としては頗る趣味多く、實益饒多なるものに非ずや」

といつたのは、國民性の一面を明かにするうへに切實な考へ方であつた。

つぎに樗牛が日本古典の現代譯を勸めたことも、今日では、餘りに常識化されて了つたが、樗牛在世の頃においては、やはり、進んだ考へ方の一つである。彼はその必要を實地に感じた事情を述べ、

「吾人、此頃藤原時代研究の要ありて、榮華物語を繙きぬ。是の物語は專門國語學者にとつて左程の難物に非ざるべし。されど吾人にとつては半解の外國語を字書を引き〳〵讀み行くが如き思あり。爲めに費せる時間と勞力とは、實に

夥しきものなりき。吾人は是の苦しき經驗によつて切に一疑問を起したり。曰く、我邦にては國學者に非ざれば、歷史家たる能はざるべき乎、歷史問題研究の門戶は國學者ならぬ凡ての人に閉ぢらるべきものなる乎と、而して吾人自ら答へて曰く、是の如き事は不道理なり」

といひ、之が解決方法として、普通人の解し難い古典を凡て現代の文章に書き換ゆるの賢明な所以を說いた。

そして樗牛が差當り、要求したのは『榮華物語』及び三鏡（大鏡、增鏡、水鏡）と歷史の參考とすべき諸物語、諸日記である。之が要望につき、樗牛は、

「其の解釋の一人一家の說にあらずして、嚴に國語社會の定說に準據し、學者をして原書と同樣に安んじて是に憑依せしむるを要す」

と注意したのである。

更に彼は、和漢古典の新研究についても之が方法の開拓に關し、見るところを

述べ、當時の弊害を指摘してゐる。

「吾人をして忌憚なく直言せしめむ乎。從來の和漢學者は其の學に於いて餘りに偏狹なる意見を有したり。其學をモノポライスするの風習を有したる點に於いて、外邦輸入の新科學を冷眼視したる點に於いて、古來傳習の儀型に泥みて一般學術の關係を意識せざるの點に於いて、倨傲尊大にして自ら高く標置したるの點に於いて、概ね偏狹の詆を免れざる也。訓話釋義と典故辭令とは、註解類書の完全なる述作によつて、或は其の困難を排斥する得べし。必ずしも第一流の學者を煩はして是れが講究に從事するに足らざらむ乎。且つ夫れ訓話と典故とは皆攻學の前程のみ。今日以後に於いて訓話典故を以て、究竟の目的とするが如き學風を奬勵するは、寧ろ一般學術界の進運に背馳する無からむ也」

全く樗牛は、古典研究上に於ける新しい方針の必要を提示し、史學、國文學、漢文學の新天地を開くべき鍵を供給した。ここにも、樗牛の日本文學闡明に對す

る間接的熱意を酌み取ることが出來る。

四、國民文學の建設

かうした欲求に燃えた樗牛がその日本主義提唱に呼應して、國民文學の建設を叫んだのは、當然の勢である。惟ふに、現時の文學も亦日本主義の徹底、强化を期待せられてゐると同時に、文學報國會の出現を見たが、その爲すところは、前進的でなく、寧ろ回顧的である。或は『愛國百人一首』を撰し、或は平田篤胤の百年祭を催すの類で、その事は無意義ではないが、文學報國會の積極的任務は、新國民文學の建設にある。この方面において何ら思想的展開を示さず、內容の向上、深化を見ないのは何故か。私らは之を第一の遺憾としてゐる。

之にくらべると、樗牛が早く愛國文學の誕生を促し、日本精神を基本とする文學の建設を熱切に求めたことは、確かに積極的意圖の見るべきものがあつた。之

につき、彼は明治三十一年、『小説革新の時機』の題下に「非國民的小説を難ず」といふ言葉において、新國民文學の創建を勸め、ついで、曲亭馬琴を回顧して、その國民文學に先驅した業績を推奬して、第二の曲亭馬琴の出現を熱望したのである。

○樗牛の國民文學要望

「試みに問はむ、過ぐる十年間の寫實小説は果して何れの點に於いて國民的性情を解釋し、若しくは是れを滿足したりとするか、日本國民は快濶、樂天の國民なり。然るに寫實小説は悲哀、厭世の恨事を説く。日本國民は尚武仁俠の國民なり。然るに寫實小説は涕淚柔懦の事蹟を語る。日本國民は世界の中に於いて最も道義的情緒に富める國民なり。然るに寫實小説は彼等に向つて非倫敗德を奬む。日本國民は忠孝義勇を以て人道の大本となす。然るに寫實小説は一も君父を言はざるなり。

日本國民は家系の繼承を重じ、國家の運命を懸念するに於いて世界其の比を見ず、彼等は君父の爲めに死するを以て最高の名譽とし、國民の利福は獨り國家の昌榮の中に見出し得べきことを確信す。然るに寫實小説は却て彼れの爲めに情死を説き、民權を説き、平等を説く。花柳の情報、市井の屠沽、寫實小説是れを寫して往々其の精巧を究む。作家の技巧愈々精にして國民の是れを去ること愈々遠し」

以上、樗牛のいふところは、明治中期の寫實小説の弊害をよく穿つてゐる。そして樗牛は、之が責を坪内逍遙の『小説神髓』における寫實主義の提唱に歸してゐるが、これは、必ずしも當らない。唯硯友社その他の小説家が國民的自覺を缺いて、西洋小説の摸擬に忙はしかつたことの非を責めねばならない。樗牛もまた之について、痛歎の聲を洩らした。

要するに、當時の小説家は、餘りに無自覺的であつた。中には、幸田露伴博士

の如く、比較的に日本主義的傾向を帶びた作家もをり、また樗牛が指摘した村上浪六氏などもをつたが、概して日本主義的でない作家が餘りに多かつた。

のみならず、今日、日本精神の聲が昂揚せらるゝ迄は、日本文學の諸傾向は、西洋追隨に終始してゐたのである。かうした工合で、樗牛が國民特有の性情を列擧して、玆に筆を著けんことを要求したにも拘らず、當年の作家で之に耳を傾けたものが幾人あつたかといへば、恐らく皆無にちかいほど、沒反省的、沒思慮的だつた。

蓋しそれは、思想界、學界の西洋依存的風潮に基づいたのであつたから、ひとり、その責を作家のみに歸するのは、失當であるかも知れない。

唯樗牛が主に國民の性情のみを說いて、日本主義的理想を說かず、また具體的に之が品題を暗示するに至らなかつたことは、樗牛の用意においても、尙十分でないところがあつたといはねばならぬ。當時の作家に向つて、浪六を說き、馬琴

を語るとしたならば、何故進んで西洋の愛國小說の內容を詳しく提示して、作家に敎へなかつたか。西洋好みの作家に向つては、先づ歐米の愛國文學を調査して範を示すことが一つの最好方便だつたと私は考へる。

然し、樗牛の燃ゆるやうな熱意は素よりこれを認めるに躊躇しない。殊に彼が日淸戰爭時代に當時の作家が戀愛小說の製作に耽つて、愛國文學に挺身しなかつたことを非難した叫びは、今日の或一部の作家にもう一度、讀ませたい氣がするのである。

○樗牛の愛國文學提唱

「王師海を越えて西に動き、國を擧げて國家的精神の大運動に熱中せし時、我が濟々たる小說家は果して何事を爲したりしや。我が國家が國命を懸けて東洋の平和を爭ひし時、彼等は其の戀愛談に苦心するを以て文士の本文を知れりとなしたりき。

兵は戦に臨んで生還を期せず。而して闔國の民唯其の兵たらざるを恨みとし、一朝令の下るを待ちて、商は牙籌を捨て、農は鋤鍬を抛ち、學者は其書と筆とを擱きて共に銃劍を握らむことを期せし時、彼等小説家は冷眼にして世を看他し去り、一人の其筆に火して愛國義勇を唱へたるものあらざりき。

偶々二流以下の小作家が戰爭談を著はすあれば、彼等は却て際物師として擯斥し去りたるに至りては、吾れは殆ど彼等小説家に國家的觀念の存否を疑はむと欲するなり」

樗牛は、かく當年の小説家の國事に冷やかなること、愛國の情熱に乏しかつたことを文學上から鋭くつきつめて非難した。惟ふに、日露戰爭當時に於ける文學者の言動を樗牛が見たとしたら、更に一大痛罵を浴びせかけたにちがひないと思ふ。それほど當年の小説家は、西洋追隨に中毒してゐた。

五、國民音樂と國歌創作の要望

終りに樗牛は非國民的小説家の一群に向つて冷罵を加へ、

「想ふに當時（日清役）の小説家は、不幸にして我が國家の沒落に遭遇するも、尚其の戀愛談の補綴に日も足らずとせしならむ。否らざれば、中夜月明に乘じて亡國の殘府を訪ひ、是の好詩的題目を與へたる上帝の惠を感謝せしならむ。あゝ國民は是の如き文學者と、何の爲す所ぞ。彼等は何を以て實世間を賤しむか」

と叱責した。

今日、愛國文學の出現を要望するの聲が高く、皇道藝術の叫び、日本精神主義の作品を求むるの聲が高いときに當り、樗牛の國民文學提唱は、時代の先聲として、玆に新しい意味、新しい呼びかけを爲すかのやうに思はれる。無論、その要

求內容においては、いろ〳〵懶らぬところがあるにもせよ、樗牛の熾烈な愛國の叫びは、力强い響きを伴なうて、內容上、深みあり、熱があり、技巧上、純日本的淸新性を帶びた愛國文學の登場をひし〳〵と促してやまぬやうに思はれる。

この意味において、樗牛の白本主義文藝運動は、その當時にあつては、反響が乏しかつたにもせよ、彼の叫びは、無意義でなく、遙かに今日に呼應するところがある。この點で彼は國民文藝建設の先覺者である。現に彼は、『國樂制定の必要』、『國民歌を撰べ』の二篇を書き、西洋音樂本位に流れた傾向を是正すべき必要を叫んだ。

「從來及び現在の音樂一にして足らず。其の西洋より輸入せられたるものは、一個の美術として見むには、誰か其の優秀なる價値を拒むべき。而も國民生活と圓融抱和するに及ばず。卽ち國民的音樂として毫も爲すなき也」

と樗牛は力說して、進んで國樂の必備條件を擧げて、(一)國語と調和すべきこ

と、(二)國民的生活狀態と抱合すべきことを主張した。卽ち之につき、樗牛は

「かの國語の性質を顧みず、猥りに西洋音樂家の遺蹤を踏襲して過たずとするもの、其の生活狀態の如何を顧みずして、偏へに彼れの邦の樂を喜ぶもの、爭でか國民的音樂を確立することを得べき」

と非難し且つ注意したのである。

加ふるに樗牛は、輝く皇國の面目上、國民歌撰定のことに及び、

「一定の國體あり、一定の國民道德あり、而して一定の國民歌無し。大典丕儀に際して國民の謳歌せむとするもの其れ何によらむとするか。『君が代』の歌、洋々太平の象あり。されど尙沈靜幽寂の格調あるを恨みとす。未だ生々的、進取的、尙武的大和民族の心血を鼓舞するに足らざる也」

と直言し、一步進んで、

「吾人は國民的大抱負と國家的大理想とを發揚せる、更に雄大に更に壯烈なる

國民歌を要求す」

といつた。當時、樗牛は早くもかうした方面に著眼して、日本精神を國樂、國歌のうへに積極的に發揚せんと企てたことは、今日の情勢に照らして見て、樗牛の提言の適切、妥當を感ずるのである。

第五章　樗牛の道德・倫理的苦悶とその歸結

一、樗牛の一轉機

その後、樗牛の一轉機が來た。

それは三十四年一月のことで、日本主義からニイチェ主義に轉向したのである。どうして樗牛が玆に至つたか、その心理的經過は不明である。三十年六月以來、約五年近く、彼は日本主義のために健鬪したのであるが、偶々ニイチェの哲學に接して、心中動搖を感じつゝあつたとき、玆にその全心を傾到すべきものをニイチェにおいて見出したのである。かくして樗牛は新しい天地を玆に開拓しようとしたのであつた。

惟ふに、樗牛が日本主義を唱へた時代において、クリスト教一派、世界主義一派から手ひどい攻撃に會ふことは、豫期したであらうが、友人大町桂月、建部水城諸家など、寧ろ共鳴するであらうと想つた人々が日本主義を罵らうとは思はなかつた。殊に大町桂月は、『少年文集』で、日本主義に贊成し、「國粹保存は去りて國粹發揮の時代は來りぬ」といつたほどだつたが、『帝國文學』では、

「日本主義は國家を毒するものなり。井上、元良、湯本の輩は商堅的匹夫のみ」

と漫罵したのである。

之には、樗牛も餘程、氣を惡くし、明治三十年七月、『大町桂月に與ふ』といふ公開狀を『太陽』誌上に發表した。そして桂月の感情一方に傾いた批判を詰問したのである。

「桂月義俠の精神を以て評論の筆を執る。既に其第一歩に於いて其方針を誤れるなり。若し斯の如き評者にして日本主義と云ふが如き國民的道德主義の批判

を企てたりとせば、天下誰か其の大膽且つ滑稽なるに驚かざるものあらむや」

樗牛はかく桂月の矛盾を指摘し、ついで桂月の誤解が日本主義同志木村鷹太郎の說によることを知つた。木村は、常に脫線的言辭を弄し、赤穗義士はギリシャ人だといつたやうな、途方もないことを平氣でいふ無邪氣な人であつたから、日本主義宣傳においても、獨斷的なところが多かつたやうである。桂月はこの木村の言を井上博士その他の人々の言と思ひ誤り、日本主義一派を罵つたのである。

故に樗牛はこの點を衝き、

「偏見私好にまかせて佼々の辯を弄したるは、桂月の爲、殊に惜しむべしとなす。木村鷹太郎氏一人の所說を捉へて、僅に古典の註釋を是正し得たるの故を以て、敢て日本主義の全體を是非す。是の如きは日本主義を理解するの能力なきものなり」

といつた。かく同志たるべくして同志たらず、理解者たるべくして理解者とな

らないものが相當にあつたのは樗牛の殊に心外としたところであらう。

且つ進歩してやまず、向上を怠らない樗牛が日本主義の内容を深化し、整頓、擴充するに至らなかつたことは日本主義の成長上、面白くない結果を來たしたであらうと思はれる。

かくして樗牛の轉機は來た。そこで彼は明治三十四年一月、『太陽』誌上に『文明批評家としての文學者』と題する一文を發表したのである。これは、彼のニイチエ主義宣言とも見るべきで、彼は何故ニイチエの哲學に共鳴して、積極的にこれを鼓吹したかを言明してゐる。

これには二三の原因があつたと見られる。それは

(一) 在來の道德、倫理が一部の思想家、教育家により、眞實性を缺いて皮相的、形式的に說かるゝのに慊らなかつたこと、

(二) 歐米式デモクラシイの平凡、庸俗に流るゝのに不滿を感じたこと、

(三) 明治文壇の凡人主義、低調趣味、戯作者風未脫却に不平と失望とを感じたこと、

(四) 何か新局面を展開しようとあせつたこと、

(五) 浪漫主義的な考へに傾いたこと、

(六) 煩瑣學風を好まなかつたこと、

などであつたらうと思ふ。

さういふ原因を知らぬものは、樗牛のニイチエ鼓吹に甚だしく反對した。然し、今日から考へると、樗牛は惡意をもつて、ニイチエ哲學を日本に普及しようとしたのではなく、彼としては、いろ〳〵の原因に動かされて、自然にここへ出て來たのである。

二、煩瑣學風への反抗

樗牛は若かつた。

從つて、彼は敏感であり情熱的であつて、永く一つのところにじつと安著すべく、一種の動搖性を持つてゐた。故に日本主義の五年間を送つた後、彼は方向を轉じて、個人的天才主義を唱へ、權力意志の象徴たる超人に渴仰するニイチエに赴いた。

その過程は、はつきりしないが、右にあげた如く、一部の思想家、教育家が倫理、道德を說くに當り、餘りにこれを形式化し、皮相化したのに不滿を抱いたのが一因だつたであらう。

彼は、さういふ人々を道學先生として嘲つた。つまり、それは、御座なりの倫理說法、道德講義で若々しい血液をそこに注入することを忘れ、時には、僞善的、虛飾的な傾向を伴なふのを座視するに堪へなかつたのであらうと思ふ。

惟ふに、當時以上のやうな傾向が一部にあつて、何事も「勿れ」主義で押し通

し、禁欲を說き、謹愼を語り、倫理、道德に若々しい血液と生命とを注入すべき用意に缺けたものがあつた。樗牛は、かうしたことに堪へられなかつたのであつたらう。

更に歐米に於けるデモクラシイが凡人本位主義となつて、天才を殺し、すべてを凡常化することは、西洋十九世紀に於ける弊害と考へられ、有識者はこれに慊らなかつた。この點、樗牛の共鳴したところで或意味で樗牛は、一種の意義ある貴族主義者であつたといへる。故にデモクラシイに根據を置く平凡主義を不滿としたのは彼として當然の歸結だつた。

若しそれ明治中期の文學者らの低調淺薄に至つては私も文學雜誌『新聲』で度度非難したところである。樗牛が之を不滿に思つて、小說に於ける文明批評の意義に想ひ到つたのは、當然であつた。

要するに樗牛は、一方でジャアナリストとして新局面を開展し、彼の人氣を落

すまいとしたことは蔽ひ難い。そこで彼は藝術上ロマンチシズムにゆき、大膽、奔放な空想世界へその翼をひろげゆくと同時に、西洋學の方法論による煩瑣學風を一排して、眞實性を把握しようとつとめたのは、事實にちがひないと思ふ。

要するに、樗牛の心理には、同情すべき點が相當にある。然し、ニイチェ主義をその儘、何の注意をも十分に附加しないで時代反抗的に之をいきなり宣傳したことは、樗牛の不行屆といつても宜からう。

何となれば、いかに天才が偉大であつても、一人の天才のために百千の凡人を犧牲として宜いと樗牛が考へたことは、餘りにも極端にすぎるからである。且つ樗牛が皮相的、形式的倫理と道德とに反抗して、性慾の或自然的解放を是とした如きも、餘程、註釋を要したのであるが、さういふ點を十分解明するに至らないで、ロマンチックに只管天才謳歌を高調したのである。

かうした點は、或一部の誤解を招きやすかつた。殊に權力意志を本とした超人

の存在を讃仰するのは、ニイチェ主義にあつては、必然なりとするも、一般人には、容易く呑込めない。少くとも、樗牛と同一にちかい考へ、樗牛と同じ心持になるものでなくては、理解し難い。故に樗牛の本能滿足を强調したところの美的生活論に至つては、寧ろ强い反對の聲が一般的に多かつたのである。

三、樗牛の眞摯な告白

今、樗牛のニイチェ主義につき、彼の言ふところを窺はう。これには、樗牛がニイチェ鼓吹の原因から究明することを要するであらう。率直にいへば、日本主義とニイチェ主義はどの點でも概ね一致しない。日本主義は國家中心主義であり、ニイチェ主義は絶對個人主義である。また日本主義は日本精神に立脚して尊皇愛國を第一義とするが、ニイチェ主義は、歐洲精神に立脚して、超人主義、天才主義を主張する。

故に樗牛が玆に赴いた心理は表面上、不可解である。これは、樗牛が何といつても未だ若く、また前述したやうに日本主義に對する理解者が當時の學界に於いて、存外、彼の思つたよりも少く、また支持者の方面も豫期したやうでなかつたことに失望と焦燥とを感じた結果、急轉したのではなかつたらうかとも思ふ。

殊に眞率な樗牛には、いろ〳〵の惱みや煩悶が頻りに心中に起つてゐた。蓋し樗牛が日本主義を唱へた時代に當つては、學界において、道德、倫理の講說上、眞摯性を缺き、眞實性を失ひ、餘りにも形式的、御座なり式で、そこに强き信念なく、情熱なく、自覺なく、體驗に乏しいところが多分にあつた。樗牛は、この點において特に大きい不滿を感じてゐたと思ふ。その不平の情を樗牛はかう表白した。

○本末の顚倒

當今史料編纂先生ありて歷史家なく、哲學史家ありて哲學者なく、敎育學者

ありて敎育家なく、道學先生ありて德行家なし。甚だしい哉、末本の顚倒さることをや。

○自ら欺く無くむば幸也

曾て倫理專門の新學士に告げて曰く、卿等百歲にして道義を說く、可也。昨日校舍を出でて今日人の子に敎ふ。危からずや。人生の幽微、素と文字の外にあり。讀書萬卷、自ら語る無くむば畢竟死學のみ。卿等自ら欺く無くむば幸也。

○口耳の學

口耳の學は口耳の人を造る。人物獨り人物を造り得べし。道學先素、眞に世道人心の爲めに計らむと欲せば、百卷の著書よりは一身の德を修めよ。人々自ら悟らざるべからず。

○パンを求めて百を得たり

吾人は靈性の安慰のために宗敎を要す。而して今の學者與ふる所は宗敎の學

說のみ。吾人は理性の平和の爲めに哲學を求む、而して今の學者供ふる所は哲學の歷史と認識論とのみ。吾人は吾人の人格の修養の爲めに道德を要む。而して今の學者の訓ふる所は倫理學の理論のみ。米を求めて砂を得たり。パンを求めて石を得たり。嗚呼何ぞ飢えたるものを如何せむや。

○煩瑣學風

歐羅巴中世のスコラスチック學派を煩瑣學派と譯すること行はれたり。されど吾人を以て見れば、今の我邦の學風ばかり是の煩瑣てふ文字に稱へるは無し。容易しき事柄を難かしく言ひ立つるをば學問と心得る、煩瑣學風に非ずして何ぞや。常識を無視し、ひたすら文字倫理の末に拘泥して故らに融通會心の道を杜絕する、煩瑣學風に非ずして何ぞや。セセコましき小理窟をのみ尙びて、分類解析の外に、ファンタージの大いなる力を認めざる、煩瑣學風に非ずして何ぞや。吾人は是の煩瑣學風が方今我が思想界の一大勢力となりつゝあるを見て、

轉々我が學術の前途を危むの情を禁ずる能はず。

是の如き煩瑣學風は動もすれば、趣味を沒し、人情を沒し、常識を沒し、亦動もすれば、人生の大本に對して、其の統一的存在を打破するの恐れあり。其の結果は、方便主義となり、形式主義となり、ラショナリズムとなり、フキリスチニズムとなる。是の學風に感染せる人は、手足に餓くる所こそ無けれ、其の心は片輪也。今の世の道學先生の多くが、かかる片輪の徒なりとせば、洵に歎かはしき次第ならずや。(下略)

○煩瑣學風と文學者

(前略)學術上に煩瑣學風行はれ、德敎上に形式主義行はる。正しく是れロマンチック運動が思想感情の自由のために興るべき秋ならずや。今の世にバイロンあらば、其の惡魔の如き力を提げて起つべき筈也。もしハイネあらば、其の毒蛇の如き舌を揮つて罵るべき筈也。(下略)